

ところで、また、白日光耀の下で、形もない鱈の、日のこぼれの、藻屑の、ころころ田螺の、たまには跳ね蝦の立鬚まで掬はうとして、箆をかるく、足をあげ、手で鼻をつまみ、振りすて、サッとまた箆を、空へ、コラサッである。

色つぼい、色つぼい。

「やははい。」と顎を出す、眼で挑む、「旦那やア。」となる。

それ逃げ出せと、甲蟲の突進だ。

サッと、娘子軍途を開く。そこで私も銀錢をみつぶし、チャリンと撥で受けると、片眼のそのお婆が、

「へい、ありがたう。」

「行つてらつしやい。」「ごきげんよう。」「また、今晚ね。」「チュウと鼠鳴きだ。

狐につままれたかな。

ああ、楸松、楸松、さるをがせ。

*

「あいつら何です。」

「白首でさあ。」とN老人。

「あ、家が見えて来た。」

「どれ、ほう、村だな、村だな。」

「や、お祭らしいよ。」

それでわかつた。あの娘子軍の一行、浮かれ浮かれて、村はづれを、人の氣もない山へ山へと練り出した。そこで遭遇した私たちがだつたのだ。酔興だとも思へるが、流石に原生林の中の寂しい生活者の姿である。

「ストップ。」と誰だか怒號つた。

ビールやサイダーのビラがある、「ひやむぎ」と書いた貼紙、店は開け放して、長い床几が二三脚、硝子の簾、造花の軒飾、祭の提灯。

物珍らしさに、私たちはその土間へづかづかとはひつて見た。さうして黙々と肢や脚を揉んでゐる卓上の銀縁の蒼蠅にこれはと目をしかめた。

「ひやむぎでもやるかな。」と私が笑ふと、

「健啖だなあ。」と庄亮が驚く。

だが、ビールの一二本がすぐと抜かれた。

所謂後家さんの屯所であらう。それらしい二三軒が向ひあひに、その新聞紙貼りの二階の壁までが露には見通せたが、野猪のやうな毛むくじやらの男の幾人かの顔も、とある廂の下に何だか陽氣さう

に集つてゐた。外に荒物屋が一軒。

此處が清水村逢坂。

何でも、そこらの山林にゐる伐木人夫どもが、たまに酒でも飲みやつて來ようといふ、ほんの五六戸の部落らしかつた。それでも何といふ寂しい夏の祭であらう。晴衣著た子供たちの姿も見えなければ、化粧した若い女のけはひもしなかつた。

いや、ありつたけの娘子軍は、すでにチャンチャカ／＼の鱗すくひに出拂つてお留守なのである。そこで、水筒に水を入れ替へて、またガソリンの爆音を立てさせた。

*

林が林に續いた。高原が高原に續いた。

露領時代のままの驛遞が或る林中に幽かに薄紫の炊煙を立ててゐるのも見た。その驛遞は丸太組で、極めて簡朴な、さうして異國風の雅味を持つた建築であつた。それに赤みがちの錆色にも古びがつき、硝子窓の切り方などもかなりに凝つて、尖つた屋根飾や軒飾なども單純で、いかにもまた雪の深い樺太の情趣を忍ばせるものであつた。

蹄鐵、長柄の鎌、フォーク、斧、鉋の類がその土間には放り出されてあつた。

日の光が、黒い榎松の梢々の間でちらちらした。

薄ら寒い雲の流れでもあつた。

と、その上手の、まだ木の香のなまなましいバラックの、戸は引いて、窓も閉めたのが、その中では何か盛んに喧騒してゐた。たしかに酒に酔うた五六の人間の放歌高吟がきこえた。

そのバラックの前に黒塗りの立派な函自動車が待たしてあつた。

私たちの甲蟲はその前をまた爆音高く通過した。

*

私たちはまた、かうした原生林の中の幾つかの驛遞や部落を通り過ぎた。部落といつても全くの寒村で、急勾配の廂の長い丸太式の家が二戸か三戸か、ほんの飛び飛びに竝んでゐるきりであつた。

山はいよいよ高く、林はいよいよ深く、道はいよいよ迂回して、氣流はまたいよいよに冷ゆるばかりであつた。

霧が驟雨のやうに流れて行つた。

ああ、さるをがせ。寒い寒い幽かな絲狀の懸垂。英國風のクラシックな風景畫の黒檜の骨格。その枝々のあのさるをがせ。

さうして、私はまた見た、その背景の白い雲の峰を、また、密叢した落葉松を、

赤殿と赤たもの疎林を。

さうしてまた暗い谿谷の中腹の白く輝く白樺を。

何といふ處女林、清高な、犯し難い、然しまた永遠の神性。

私はまた想像した、雪に埋れ、氷に閉され、伸びては枯れ、枯れては生ふる林相の無常を、またその光明を。

あ、あれは何だ、あの赤い實の鈴生つた蔓草は、やどり木は。

あ、紅葉も見える。もう秋だ。ああ、もう秋だ。

*

山峽である、ややうち開けた。

リュクサックを負つた、繪の具函を水筒を肩から掛けた、三人の角帽の學生姿が流るる霧にぼやけ、日の光にまた現はれて、その幽かだつたPPPが急に大きい影像をつい眼のさきに爆^はじかせて、逆に振り向くと、「やあ、やあ、やあ、やあ。」と満面の笑顔を輝かせた。

「やあ、君たちだつたの。」

「おお。」

「ほう。」

「S君。や、T君もだね。」

「Y君、これは驚いた。」

口々に私たちも驚いて帽子を振つた。自動車は停まつた。日本醫專の二人に工科大學生の一人であつた。

彼等は徒歩で昨日眞岡から直ぐに發足したのであつた。

「さあ、乗りたまへ。諸君。」

「つかまつていいですか。」

と、早速に兩側の踏臺に飛び乗つた。さうして上の幌の柱に何れもぶら下つた。甲蟲に黒蟻が取りついた姿勢である。

「貸切だよ、かまはないよ。」

庄亮がすかさず、運轉手は笑はず、ボウ、ブツ／＼／＼／＼／＼／＼である。

「昨夜は何處へ泊りましたい。」

「逢坂です。」

「なるほど、これはおえらい處へ。あつはつ、彼處^{あそこ}の後家さん綺麗でしたかい。ことにM君などは大もてでござしたらう。」

「僕らはそんな不潔な處へは泊りません。荒物屋です。奥さんは立派な人です。」

とSがムキになると、

「へえ、あつはつは。」とN老人が哄笑した。

霧がまた驟雨のやうに私たちを追ひ越して行つた。

午後の日もよほど廻つたらしい。

きょうきょうと何鳥か啼いて、また幽かになつた。

ああ、黒楸。

さるをがせ。

*

一望の耕作地、鈴谷平野。

いよいよ私たちの自動車は最端の峠をその麓の坦道へと迂回し初めた。

だが、その山腹のお花畑の美しさは、その紅は黄は紫は、全く何に譬へよう。たしかにそれらは高山植物の氣品と清香とを充ち満たしてゐた。

ああ、光がのぼる、のぼる。

ああ、また、なだれる、なだれる。

風だ、光だ、反射だ、影だ。

その中へ目がけて、私たちの巨大な昆蟲はまつしぐらに驀進する。

と、また、山火事に焼け黒ずみ、また雪に雨に白く晒された楸松、白樺、落葉松の疎林が、ほうほうと寒い梢を所在に顫はしてゐる。その閑寂、その地の華麗。

「山火事跡かな。」

「いや、開墾の爲に焼いたんだらう。」

「だが、少々焼き過ぎたね。」

「飛火したかも知れないさ。」

私と庄亮とはかう問ひ答へる。

螺旋狀に段々と下降しつつ、俯瞰し、また大觀しつつ、遙かに、翠緑の丘陵を平野のあなたに發見し得た私たちは、いよいよ、豊原に近づきつつある喜びの爲に歡聲を擧げた。

まだまだ三里か四里かはあるだらう。

突進、突進。

赤、赤、赤、赤、紅、紅、紅、紅、黄、紫、黄、紫、赤、赤、赤。

飛躍、飛躍。——咆哮、爆音、風、風、風、風。

*

「あつ、パンクだ。」

「また、やつたな、ちえつ。」

と、この第四のパンクの時に、それこそ私たちはもう曠々とした平野の耕作地に滑り込んでみた私たち自身を見た。

まことに砥のごとき途上であつた。

両側の畑には穂に出て黄ばみかけた柔かな色の燕麥があつた。またライ麥の層があつた。トマトの葉の濃みどり、甘藍キャベツのさ緑、白い隠元豆の花、唐黍のあかい毛、――

また、飛び飛びの伐株、測量のテント、道端の虎杖、さうして樺太路。

立ちつづく電柱の薄紫の碍子、針金。

麥粉、乾草を積んで東し西する荷馬車、また俵のうへに眠つてゆく少年。

ああ、なんだかフィルムで見たエルサレムへゆく巡禮道の情景と、そつくりではないか。

お、馬が來た。農作馬車だ、粗末な土まみれの木柙の中に十五と十二くらゐの眼の大きな百姓娘が坐つてゐる。

馬はぼくりぼくりと傍の路の葉の林へはひつてゆく。

ほう、馬の首が路の葉にかくれた。妹の娘が振り返つた。あつ、姉は澄まして駈けてゆく。うれしい緑のこぼれ日、こぼれ日、こぼれ日。

「此處で、何です、いつか自動車が顛覆しましたんで、人死がありました、それで豊原道は危険だとなつて了ひましたがね。いい迷惑でさあ。全く運轉手の過失で、こんな何でもないところで飛んだドヂをやつたものです。」

運轉手ははつしたタイヤをガバ／＼と地上にひつ轉がすと、今度のまた破損の箇處にゴムの繼ぎを當て當て、アラビヤ護謨で粘著くっけると、トントんと叩いてみた。これからまた例のポンプで空氣を吹き込まうといふのだ。技倆の未熟も恐ろしいが、掛替さへも一つしかない、それでも四度もパンクした、繼ぎはぎだらけの膏藥貼りのタイヤの、このぼろぼろ自動車に乗つた者こそ災難だらう。危険千萬だと思ふと笑ひたくもなつた。それでもまだどうにか此處まで來られたからいいやうなもの、逢坂あたりで、代りのタイヤもパンクしました、もう動けませんとでもなつたら、命は無事でも、行くにも行けず、還るにも還れず、一同立往生の憂目をみた事だらうと思ふと、思はずほつとしたものだ。どうみたところで熊笹峠にせよ箱根の新道ほどの危険な懸崖はなかつたと思へた。

どちらにしても、もう豊原は近いのだ。

「御迷惑さま、さあどうぞ。」

結局パンクの數の多いほど、今は却つて楽しみであつた。何故かといへば、その度毎に、私たちは十分の暇を得た。眺望し觀察し散策し撮影もしたのであつた。だが、もうこれきりであらう。

自動車は駛り出したが、相變らず揺れる、揺れる。

お、誰だか長い柄の草刈鎌で、一面に熟れかへつた燕麥をスマイスイと刈り立てる。いい香ひだ、いい香ひだ。

*

観ると、いつのまにか、目當の鮮やかな丘陵の緑に、裾の鼠にぼやけた白い重い雲がかぶさつてゐた。

その梢の隠された疎林、疎林、疎林。

斜陽はすでに黄ばみかけたが、さして強くは輝かなかつた。

ただひろびろとした燕麥や豆の畑に、何かしら冷氣だつた物の影が流れて、また明るともなく後明りしては陰つて行つた。

だが、道はいよいよ善くなつてゆく。

なんといい豊原道だ。

向うから小さな人影が來た、生きて動いて、何か帽子に幽かな圓光を發たてて。陽を眞ま正面もに受けたのであつた。

一分……二分……

車體はイキナリ左へ投げ出されかかつて停まつた。凄じいパンク。

すれ違ひさま、あはやと見たので、思はず急角度で避けようとしたのである。轉覆こそは免れたが、今度こそ道の眞ん中でパンクして了つた。

「危険々々、あつはつは。」

「やりきれねえ、やりきれねえ。」

だが、私たちはまた道端のやや高畦の斜面へぼつぼつと凭りかかつたり、蹲んだりした。わが庄亮は「やりきれねえ。」と言ひながら、歌のノートを取り出しては書きつけて、兎に角悦にははひつてゐた。

「しつかり頼みますよ。」と謹直なA君が今度ばかりは揶揄氣味にきめつけた。

運轉手は一生懸命であつた。

この第五のパンクが騒ぎとなつた。

ところへ闇雲に後から幕進して來た一つの高級自動車があつた。あの露西亞風の驛遞の前に見たのがそれであつた。

酔つてる、酔つてる。全くもつて、山高帽の、モウニングの、また麥稈の背廣の、眼鏡の、ホワイトシャツの、藤八拳の、安來節の、わいわい騒ぎの眼と鼻と口との連中が、不意にその前途を塞がれたので、停まると、いきなり、

「こりや、やい、ポンプ野郎。」となつた。

「こりや、やい。」

「うむ、こりや、やい。眼があるか、やい。」

「天下の公道だぞ。不届者奴。」

「往來だぞ。公道のまん中でパンクする奴ウがあるきア。」

「規則違犯だぞ。」

「赤だも、そつち避けい。」

「林野局のお通りだぞ。」

「下郎、くたばれ。」

「ばかア。」

運轉手はへえへえで、それでも、手順も一向につかぬか、あ、また、螺旋巻ばつかり廻してゐる。

こちらは、ほう、あの御仁體が樺太廳は林野局のお役人ださうなと眺めてゐる。

「早くせんかア。」ドドドン。

「ひつしよびくぞ。」ガタガタ。

「こら、こら。」ドンドン、「馬鹿野郎ッ。」

いくら躍起となつたところで、さう早急に始末のつく譯はないのだから、もうこれで五度のパンクでいかな膏藥萬能のタイヤでもさうさう無理な治療が利かう筈もなし、氣長に待つより仕方があるま

いと、こちらはみんなが吞氣である。

空に孔でもあかないのかなと、私は仰いで手枕だ。

そこで庄亮、「おい白秋、長柄の鎌でスウツスと刈つたらなあ、あの燕麥を。」

俊敏F君觀察だ。手と足何本突き出した。

重厚Hさんはただ苦笑ひでカメラをそつちへ向けてゐる。

和製タゴールさんは大茶目だ。びゆうと指笛でも吹きさうだ。眼鏡を片方はづしてゐる。

醫專の一人はスケッチだ。畑の向うの楡の木はいい形だなと、やつてゐる。外の一人は實直だ。心

配さうに避けてゐる。

工科のY君、流石である。ガバくパンく、手助けだ。

警部のAさん、京都府だ。知らぬふりです。めんだうだ。

「こりや、やい、觀光團の馬鹿ッ。」

「頼母子講。」

「龍宮の身投げ。」

「助平ぢぢい。」

「イヨウ、ハイカラア、ふとつちよう。」

「ちきしよう。」

「何しに來たア。」

「殿松強いぞツ。」

「さつさと行きやがれ、へへんへんだ。」

おやおやと、こちらは眼交で、取り合はぬ。

「やい、こりや、天ノ下アの公道だぢよツ。」

「ひきしよびくぢよツ。」

「ばきややろうツ。」

だんだん、お聲が悲しくなる。

この間おほよそ二十分間。

やつと、形ばかりの修繕を済ましたと、

また後ろでは勢を盛り返した。

「待てえツ。」

「俺の方を先へ通せ。」

「寄せろ。」

「名刺を出せツ。」

この時、庄亮、劍道仕込みで、すうツと立ち上ると、

「運轉手君ツ、さあ、お通ししてあげるぞう。諸君、押してくれたまへ。」プツプウ。擦り抜けると逃げた逃げた、一目散である。

「えらいお役人もあつたものだね。」

「ええ、どうも威張りくさつて困るのです。」運轉手。「植民地ですからなあ。」

「だがそのう、パンクして交通を停めたのはこちらの失策だが、一度叱れば済むことを、そのう、しちくどいからね。」

「僕たちは林野局の局長のAさんへの紹介状を持つて來てゐるんです。今夜も泊めて貰ふ筈ですから、いひつけてもいいです。」と醫專のM。

「まあ、いいさ。黙つておくさ。」

そこで、私たちはまたぼろぼろ自動車へ乗る。ぶら下る。駛り出す。また、パンクだ。

「ええ、もう一里弱ですから、このまま滑走してしまひませう。」

これにはみんなが笑ひ出すと、

「ようし、やれ。」

「やつつけえ。」

騫進、騫進。

と、町へ入る左口、とある廣場に、これはまた大げさな灰色の天幕^{テント}。
 おお、あのトロンボーン
 クラリネットは、
 おお、あの喇叭、
 おお、太鼓や、銅鑼は、
 さうだ、曲馬^{チヤリネ}、曲馬^{チヤリネ}。
 滑走、滑走、滑走。
 そこで、ふつと振り向く、ちらと眼に入つたは、天幕の前、象だ、象の子だ、小さい、背中に金と赤との印度織の鞍掛を著せられて、垂れ下つた兩耳の、長い灰いろの鉤鼻を揺つては振り振り客呼びしてる。や、や。
 「あ、君、象の子がある、象の子がある。」

揺れる、揺れる。
 や、楊だ、竝木だ。光る、光る、光る。
 や、紅葵だ、
 向日葵、向日葵、
 や、西瓜の花だ、縞西瓜だ。素敵。
 「や、や、露西亞人の家だね。いいな、あの丸太組みの建築は。」
 「いいなあ、廣い通ですな。」
 「や、旗なぞ出してますよ、お祭ですかしら。」
 「や、豊原だ、豊原だ。」
 「萬歳。」
 「萬歳。」
 「びゆう………うる………る。」

小沼農場

緒いガサガサした粗皮の榎松、蝦夷松、たもの木などの丸太で組み立てて樺太廳農事試験場の歓迎門は流石に簡素であつた。まことにいい趣味だと思はせた。

私たちの一行は小沼驛へ著くと、すぐに線路を越えて、その入口にかかつた。よく掃かれて塵一つとどめない白い農園道は、坦々として眞つ直ぐに熟色のライ麥や燕麥の畑中を通つてゐた。行啓の名残で、黄や赤や紫や青やの萬國旗が此處でもまだ翩翩としてゐるその下を、薄い翅のかがやく蜻蛉や蝶々の番ひが、地にすれすれに流れたり纏れ飛んだりしてゐた。空は蒸しても何かしら光らぬ北方の曇天であつた。

豊原から此處までの二驛の間は、たも、ばつこ楊、落葉松の疎林に紅紫の楊蘭やなぎらんや薄黄の山獨活、ななつば、蝦夷蘭の花がまだ野生のままに咲き亂れて、ただ處々に伐採跡の木の根つ株が顯はれてゐた。だが、この小沼へ來ると、總てはうち開けて整然とした穀物と野菜の祭が私たちの前にあつた。

案内役は林野局の局長のAさんである。

前夜、私たちは豫め定められた北一條のH屋旅館に一先づ落ちついて、大泊から廻つて來る同勢を待ち受けることにした。その晩餐後、最寄りの書店で繪葉書をあさつてみると、其處へ醫專のMがはひつて來た。

「どうしたい。」

「Aさんの官舎へ泊めてもらふことにしました。きさくな人です。飲むとおもしろいんですよ。非常に歡待してくれましたね。そしてずつと泊つていいと言つてくれます。」

「ほう、それはいいね。」

「先生を知つてゐますよ、Aさんは。なんでも辨當箱に書かれたことがあるでせう。愛翫してゐるさうです。小田原の親戚からもらつたと言つてゐました。Aさんも相州の人ださうです。」

「ほう、あの醍醐味かね。」と私は驚いた。

實はかういふことがあつたのである。

私がまだ傳肇寺の間借をしてゐた時代だからかなり古い話である。海岸のKといふ人の貸別荘によく遊びに行つたものであるが、ある時、山本鼎君と二人で、その奥座敷で快く饗應されるままにいい氣になつて、海を眺め、半日の小閑を楽しんでゐた。

主人は手のついた素木の辨當箱を持ち出して何か書いてくれと言ふ。そこでよしよしと醉筆をふるつた。それが醍醐味の三字であつた。いつかしらまた、それがAさんの手に入つたものであるらしい。

主人は土地や山林に關した仕事をしてゐた。商才に長けてなかなか機敏な人であつた。「ちよつと、林務官が見えてますから。」と時々中坐した。その時の二階の客といふのが、今思ふと恐らくAさんであつたであらう。

私たちは陶然として了つた。もう少し酒興が深めばいよいよ羽化登仙といふところで、サラリと正面の襖が開いて、コツコツと杖こそ突かぬが、ぬうとはひつて來たは白髮白髯の老紳士とその老夫人であつた。主人は後ろから元氣な赤い顔をして蹤いて出て、

「ええ、こちらが十二疊でございます。」と、上座の私たちを、目八分に透かすと、

「只今、ここに御酒をめしあがつていらつしやるのが北原白秋先生に山本鼎先生でございます。お家賃は百五十圓で。」

「おいおい。」と鼎さんが私の袖を引いた。

「僕らも家賃の中へはひつてゐるらしいよ。」

「や、こりや驚いた。逃げよう逃げよう。」

向うでも流石にすぐ引つ込んだが、後できけば、有福ななにがしの子爵とやらであつた。

二階の客も逃げたらしい。小田原舊城の倒れ木の拂ひ下げもついぞまとまつたといふ話もきかなかつた。

ああ、あの醍醐味の辨當箱かと、私はまた獨で苦笑した。

そのAさんは背の高い瘦形の、鼠の背廣に麥稈帽といふ輕装で、氣前よく私たちの先へ立つて行つた。役人臭のない、極めてさつぱりした中老年人である。さうして時々突拍子もない諧謔を弄した。

(だが、その翌日、林野局に私が挨拶に行つた時は全く硬直した官僚的態度で、や、さうですか、や、と大きな事務卓を隔てて、にべもなく私の純情を跳ね返して了つた。そこで一寸てれた形になつた私はそこそこに辭去したのだが、同じ昨日の人でありながら、かうも役所では變れるものかと思議でならなかつた。これは別に悪い意味で言ふのではない。私にはわからないから呆然として了つたのである。)

さて、私たちの歩みが薄紫の花のむらがる馬鈴薯畠の前に來たところで、何か親しい秋雨のやうな細かな霧雨も降り出して來た。

*

この菜園でも、白い蝶々のひらひらが低く、燕麥の穂から穂へとわたつてゐた。蝶々の翅も幽かに雨を感じたらしい氣であつた。

菜の花の鮮黄の群も眼についた。

もち稗も熟れてゐた。

苧麻畠のややほの青みを保つた熟いろの柔かさ匂やかさは何ともいへなかつた。まだ紫の花がちら

ちらと残つて、多くは小さな小さな圓い實をつけ初めてゐた。
 菫葱の花の大きなやや毛ばだつた紫の球にも細かな霧の小雨がかかつてゐた。

庄亮はノートに歌を書く。

私は標本を讀んで行く。

ライ麥（アルコール原料）かな。

アムール、

サクソン、

スプリング、

浦鹽、

アブルック。ラン／＼／＼。

やあ、キャンデータフトか、白い花。これはいい花、寫生しよう。

や、トマトだ。蕃茄か、アリアナか。

や、や、南瓜だ、ころげたな。

デリシアスかい。

ハッバードか。

まさかり南瓜だ、驚いた。

魔法杖でもちよいと振りや、娘ふたりがダンスの沓にもなりさうだ。躍れよ躍れよ、をどり沓。

や、草苺だ、ド、レ、ミ、フ、ソ、紅いな紅いな、雨の粒。

や、木柵だ、御免なさい。

ほう、すかんぼだ、枯れ花だ。

朝鮮黍だ。唐黍だ。

青刈用とはフレッシュだ。焼いて嗅ぎましょノスタルヂヤ。や、や、なるほど、

秣にしますか、勿體ない。あかい垂り毛も濡れてゐる。

なんと緑の疣々だ。胡瓜の花も顔まけだ。

やつ、いい圖案だ。花椰菜、民謡集の金版だ。

やあや、火焰菜、火のやうだ、ゴールドビーフのつけあはせ。

亞米利加防風、ちさ、セロリー。ゴールデンセロリーは金の莖。

瑞典蕪、大蕪、銀の鱗がちらかれば、さしづめわたしの雲母集。

人蔘の髯、七八寸、家畜用だと人はいふ。

や、蜜蜂だ、ぶらんぶん、胴は花粉で眞つ黄だな、花の色よりまだ濃いな。

おい、おい、庄亮、歌ができたぞ、四五句だけ、

大麥黄なり夏蕎麥のまへ

白花じゃがいも、赤いもだ。

紫の花、白いもだ。

雨、雨、雨、雨、傘さした。

私は口笛吹き吹き行つた。

洋館前の芝生には、圓い花壇がふたところ。

實に愉快だ。黄だ、赤だ、雪白、紫、緑いろ、

白玉葵、赤玉葵、

スウィートロケット。ジャスターデーシー、

また、金蓮花、

そして、ちらちら、コスモスの淡紅いろの花盛りだ。

そして細かな雨がふる。

裏へと口笛吹き吹き行くと。

蔓細千成、茄子の花、おはぐろつけたて、中年増、

黄と白、赤の葱坊主、毛槍かっげば供奴、

人蔘の花、八重垣姫の花かんざしの額髪、

花の痛い種牛蒡、勸進帳の篠懸だ。

此處にも細かな雨がふる。

ピッチく、チャップく、ランくくく、

ピッチく、チャップく、ランくくく。

あ、あ、牧舎が見えて来た。

なんとリリカルな異國風景、

ああ、春楡、山査子、白樺しらかんば

広い広い牧草の原、

あ、羊だ、羊だ、遠くを人が追つて来てゐる。

牧歌々と誰やらが叫んだ。

私の小唄は閑かになつた、浮かれ心は。

小雨も幽かに小やみになった。

*

洋風の牧舎の様式は早速に小型の黄色いノートを私に取り出さしめたほど私を魅了した。私は克明に寫生した。

その屋根は上部で段がついた深い急勾配で、正面から見ると将棋の駒の外観をしてゐた。棟には幾つかの空気抜きの小さな塔が竝んでゐた。屋根裏の窓は廣く二層になつて、上のは小さかつた。入口は思ひ切り大きい兩開きの木の扉が左右に裏板を見せて、ほの暗い内部を透かした向うにかつきりした長方形の雨窓と縁との畫面がうち明つてゐた。

私たちは紅い火焰菜の根を掌のひらにのせた場長さんの後に蹤いて、濡れ雪の蝙蝠傘をすぼめすぼめはひつて見た。

第一は牛舎であつた。

其處には通路を中にして、兩側に對ひ合せた間割まじきりがあり、その一つ一つに、エアシャー種や、ホルスタインの種牛と牝牛とが沈々と深い瞳を光らしてゐた。何れも黒くつやつやしかつた。角ががつしりして撓み、兩耳が垂れ、さうして悠揚と突つ立つてゐた。糞尿に黒く濕つたその床も、それでも帚の目がよく届いてゐた。青草のほひもした。

他の牧舎には耕馬もゐた。内國産アングロマン種、北樺太産洋種、内國産洋種。

骨太く、肉づき厚く、脚短く、逞しい黒い馬の、流るるがごとき光澤の皮膚。

「耕馬はこれでなくちやならないね。どうだ、このすばらしさは。」と庄亮が言つた。

さうしてその一頭の長い額を叩き、頬の膨らみから頤の毛並を軽く軽く撫で擦つた。馬は眼を細め、薄あかい齒莖をむき出し、顫はせながら、さも慥ばゆさうに笑つた。

雨がまたじめじめと降りかけた時に、私たちは養狐場の高い板圍の潜り戸を開けてもらつてゐた。

ほの黄色い燐の火でも燃えちろめきさうな空合であつた。

樹といつては白い幹の潤葉樹の白樺がただ一本うち濕つてゐるきりであつた。

狐は通路を隔てた兩側の高い金網の内を幾つかにまた割つた各自の庭を與へられてゐた。庭の中央には脚高の細長い小さな巢箱があり、その横から一方へ斜に樋のやうなものが地面へ向けて突き出してあつた。その樋の口から、きよろりと狐の眼が光つた。その樋の下には階段があつた。狐はその階段の下の地面に潜り穴まで穿つてゐた。

ともすると、庭に出て金網近くをきよそきよそと徘徊してゐる黒狐もあつた。疑心深く、驚いては逃げ、狡猾さうにまた後ろを振り向いて立ち留つた。

ああ、雨がふる。

私たちはビスケットを投げた。だが狐は徒に尻込みして容易に金網に近づかうとしなかつた。

「ぢりぢりしますね、何でああ疑ひ深いでせう。」と醫專の一人が舌うちした。

「そこが所謂狐疑逡巡といふやつだらう。」

褐色の尾の薄い青狐もゐた。十字狐や赤狐もゐた。その中に尻尾の尖りの白い黒狐の仔だけがまだ人なつこく、はしつこく、金網に飛びついて來た。可憐なその赤い舌が庄亮の掌を嘗めた。

「はつはつはつ。こりやいい。おもしれえ。」

「無邪氣だね。子どものうちはみんなああだな。」

ああ、雨がふる。狐の眼つきに、毛の光澤に。

こんと一聲。

秋雨めかしい、隣のにほひの小雨である。

養狐場を出たところで、私はまた牛舎の白い狹霧を、厩舎や豚舎の小雨を見た。雫を含んだ鮮緑の廣々とした牧草の平面を、また散在した收穫舎、堆肥舎、衝舎、農具舎、その急勾配の角屋根を。

またうち濕つた潤葉樹、針葉樹の林を、森を、また花いろの遠い煙霞を。

ああ、眼に透かすと、先ほどの羊の影繪は早や無かつた。

旅愁がしきりに動いて來た。

私は狐に遣り残しのべとべとのビスケットを吾が手に嘗めた。

「羊はもう出て來ないのでですか。」と私は歩きながら場長さんに訊ねた。

「緬羊ですか。いや、雨が降り出したのでもう入れてしまひました。なんならもう一度外へ出してみませう。雨も止んだやうですから。」と、その人は答へて、「それぢや、どうぞ此方へ。」と緬羊舎の方へ急いだ。

陰の深い楡の二三本の木立が、其處には幽雅な雨霧をまだ梢の縁に保つてゐた。

何といふ完全な楡の象であつたらう。楡ほど枝ぶりの整つた木は珍らしい。殊にそれが老木になつたほど喬く、また鬱蒼と張つてゐる。觀てゐていかにも北方の木の母だといふ感じがする。

その木立に一本の山査子がまた隣つてゐた。

製へたばかしの素木の卓子と二三脚の同じ素木の長椅子とがその陰に出しつばなしであつた。卓子も長椅子もじつくりと濕つてゐた。

私たち——Aさんと、醫專の二人と庄亮と私とは、その楡の根方に座をしめた。

少し離れて左手にまた一本の、それは最も安全な老木の楡が涼しい繁りをそよがしてゐた。その陰に正方形の素木の壇が据ゑられてあつた。さうして素木の卓子も置かれてあつた。つい前日に攝政宮殿下の御座所だつたとのことであつた。

さうして私たちの虔しく取り圍んでゐるこの卓子は、恐らく殿下の侍従たちの額が恭々しく集められたことであらう。殿下も素木の壇上に素木のあの卓子に、おん身を、そのお椅子を寛々と進め給うたことであらう。さうして遠い白樺の林のかがやきを、牧草の一面の微風を、なんと御覽遊ばしたであらうか。何といふ簡素と高貴。

御座所の方に向つて、また、四邊を廣く眺めまはして、しみじみと私は崇敬した、日本皇室の神聖と、吾が民族の由來する傳統と精神とを、さうして愈々に幸はふ吾が國の言靈とを。

御座所の後ろにはささやかな、また清らかな浅い池があつた。何の作るころもない、自然のままの池であつた。その水面が薄く明つて、平らかに、また何かの影も映してゐた。さうして周りの、紫の玉を綴つた紅首蓓^{べいめい}や、四つ葉の黄の花の馬肥^{まひ}やとすれすれに落ちつたい静まりを匂はしてゐた。あの水を緬羊も飲みにも近寄るのだなと私はまた透かして見た。それは幽かであつた。

音がした。それは初めはあるかない響であつた。その覺束ない騒^{さわ}めきが、次第に、柔かでも或る深みを持つた重い確かさで、前の緬羊舎の戸口から、緑の濡れしづくの草つ原へもこりもこりと動いて來た。

改めて驅り出された緬羊の四五十頭の群であつた。

新月形の兩の角を振り振り、素の額のまろい眶の肉の垂れた、眼の柔和な、何か老いて呆け面の、耳の蔽ひ毛の房々として、部厚い灰色の、凸凹の背の、氣の弱い緬羊は密集して、誰から、どの列から

誘ふとも誘はれるともなしに、おのづからに草を食べ食べ移つてゆく。その鈍い動きが動くにつれて立つる音から、古びた綿埃の渦のやうな、また絨毯臭い、そして高まる神祕性の何かの綜合音を感じられた。

めうう……めうう……と、あるものは首をあげた。殆ど總ては下向き下向き、草を食べ食べ移つて行つた。

と、場長さんが、若い技手に白い陶器のミルク入れと、白い西洋皿と、透きとほつた薄手のコップとを運ばせて來た。白い二つの皿には水つぽい新鮮なサラダの緑を、白い三つの皿にはやや薄黄のマヨネーズソースをかけた羊の蒸肉を盛つてあつた。それにはまた薄あかい割箸を添へてあつた。

ミルクが一同のコップに注がれた。

「これは搾りたてですから召しあがつて下さい。サラダも搥ぎたてです。」場長さんはまた付け加へた。

「この羊の蒸肉は昨日のお残りです。」

それはと一同がお辭儀をした。

「ありがてえ、ありがてえ。」と庄亮が例の兩手を振り振り、その頭をひつ擁へると、ふくれた眶を紅くして、眼で喜んで、また頭を打ち振つた。

「や、殿下もこれを召しあがつたんだな。」と、私も恐縮した。

「ええ、奉呈しました。それにお扨従の武官たちにも出したのでした。そのおさがりです。」

「いい時に來あはせましたな。ひとつ戴きますかな。」とAさんはピシリと箸を割つた。

「乾杯、乾杯、さあ。」と立つてミルクのコップを私が差し上げると、

「天皇陛下萬歳ァい。」とAさんが太聲にどなつた。

「皇后陛下萬歳ァい。」

「萬歳ァい。」

「攝政宮殿下萬歳ァい。」

「皇太子殿下萬歳ァい。」

「萬歳ァい。」

そこで、また、

「羊の蒸肉萬歳ァい。」と私が叫んだ。

「さあ、このミルクだ、搾り、搾りたてのミルク萬歳ァい。」

「搾りたての、あつはつはつ。」と庄亮が哄笑すると、「や、萬歳、萬歳。」と軽く早口に、鼠の縮

の、尻端折の、メリヤスのズボン下の、黒兵兎帯の、それがあつはつはつで掛けてしまつた。そして、

「これはすばらしい。このサラダも萬歳だ。」

「ほんとだ、これはフレッシュだ。しやししやしきする。」

緑のちりちりした葉に雨がいつぱいついてゐる。そのサラダは全く地面から湧き出た滋味そのものの新鮮さと氣品とを醸してゐる。

「お乳をかけませうか。」

「いや、これで結構、ついでにその泥のついた火焰菜も。」と私が笑ふと、

「あつはつ、甘いよ、そりやあ。」

「甘くていいぢやないか。僕はこの頃何だよ、詩を作る時には、きつと砂糖を嘗めるよ。」

「をかしいかい。」

「をかしいともう、それはお酒でございませう。」

「酒はきらひだ。」

「あつはつはつ、さうでせうとも。」

「だがね、砂糖を嘗めるのはほんとだよ。頭が緻密になつていい。疲れが直るよ。だから、紅茶にド

ツサリ入れて何杯も何杯も飲む。」

「驚いたね。」

「酒は好きだが、酒を飲んだら僕には詩も歌もできないね。小唄ぐらゐはどうだか知らないが、どうしても觀照に罅が入るね。慷慨激越の詩なら兎に角、精確な寫實をやる時は酒に酔つた感覺では駄目だ。心は鏡のやうに澄んでゐなければならぬからね。それでも書ならば陶然として書き飛ばすがね。」

無慾恬淡だね。とすると歌などの時は少々固くなり過ぎるかも知れないな。尤も書はいつでもいいと思ふ氣持があるからだ。だが、詩や歌は本藝だとしてゐるからね。酒の時はまた酒だけでいい。でないとな酒の美德を傷ける、と、かうなる。」

「やつぱり、酒のみだよ。」

「いいさ。だが、甘いものもやるよ。」

「ぢやあどうぞ。お砂糖をどつさり。」と技手君が砂糖壺を差しつけた。

「ありがたう。いただきますよ。それぢやミルクをもう一杯。」

これはうまい、濃厚だ、實につめたい、「おう、庄亮もう一杯やれ。皆さんどうぞ。一となる。」

「よからう。だがいいかい。そのう。」

「かまやしないよ。」で、「いくらでも搾れるでせう。」と、すこし顔が紅くなる。

「よししよ。」と醫專のMが聲を掛ける。

庄亮、「砂糖といへば、俺はもう閉口々々。何だらう、そうれ、千葉から印旛佐原へかけて、本黨は親父の地盤だらう。去年の選挙の時なんだがね。俺たちは、そのう、朝の暗えうちから、草鞋ばきの尻端折で、吉植です、ええどうかよろしく、ええどうかよろしくさ。あつはつは、やりきれねえ、やりきれねえ。だが、じつは半分は歌を作つてあるくんだからおもしろい。それこそかまやしねえ。山路などにかかるてえと莖が咲いてる、四十雀が鳴いてる。厩の裏でも通りかかつて、尻でもブツと

こき落すと、馬がコトリとやるんだからね。きまりのわるいのわるくないの。」

「よくやるんだね、君は。だがお砂糖はどうしたい。」

「そのう、お砂糖があ。問題なんだね。それ、どうせ印旛沼だ。あつちに一軒、こつちに二三軒だ。」

一日がかりだあね。とう、やつと尋ねあてると、吉植です。それはまあ御丁寧さまに、さあどうぞ。」

さてそこで砂糖を。」

「砂糖を。」

「お手をどうぞと言ふから、それ、右の手を出すと、お砂糖さ。こいつはたまらねえ。だが、そこは神妙に、ありがたうございます。厭な顔でもしてみたまへ。何だ吉植威張つてやがる、俺ら百姓だがあとなる。そこで一票ファイさ。仕方なくなく嘗めるんだ。あつはつはつ。それがまたその、次から次へとさうなるんだからね。掌はべとべとする。口は甘つたるくなる、胸はむかついてくるしね。悪く行き合せると、田舎の事だから、牡丹餅をこしらへてる。餡粉の草餅を揉んでる。まあまあ、どうぞお一つ、どうぞもうお一つ、てこ盛りで、勧め方があくどいからね。それに野天は暑いし。」

「あつはつは。」とAさんが笑ひ出した。「それはお苦しい。」

「ええ、そのう、かう咽喉元まで詰込んだやつを、正直に、や、もう眞平とでも言はうものなら、それ、また一票ファイとなる。ポロリポロリと涙がながれる。そこへもつて来て、お隣へ廻ると、またお砂糖。親父を代議士に持つんぢやねえ。子泣かせだよ。」

「なるほど、さう一々お砂糖をお嘗めならなくとも、どうにかなりさうなものですね。」と場長さん。
 「いや、後で気がついたんですがね。そのう。」
 「いつも後で気がつくんだ。」

「待ちたまへ。そこで、と。さう嘗めてばかりしぢややりきれねえ。で、嘗めたふりして、かうそつとふところへザラ／＼／＼さ。祕傳だね。だが、こいつも困つたよ。内ふところがそれ汗まみれだらう。べと／＼する、くつつく。とても氣持がわれえ。」

さあつと驟雨が走つて來た。

驟雨は樹林の前、牧舎の裏ほど白く白くその雨あしを際立たせて、一齊に騒めき慌て出した緬羊の圓い圓い圓い背の重りを、たちまち模糊たる霧煙の中に引つ包んで了つた。

めう……めうおおお……めう……めうおおお……

それこそまた滯鼠になつて、向うの向うの應舎の方へと、いつさんに駈け出す私たちであつた。

*

大陸的な樺太の八月の驟雨である。いかにそれが異郷風の壯觀であつたかは想像してくれたまへ。私は眺めてゐた。應舎の押上げ窓の硝子を透かして。

眼も彩あやな花壇の紅が、紫が、雪白が翻つた。雨の飛瀑が襲來した。

フィルム。フィルムの急速度の線、線、斜線。

前面の菜圃が。——青黍、もち稗、花椰子、火焰菜、トマトが、南瓜が、ああ大蕪が。

すばらしい、すばらしい。雨だ、音だ、銀だ、ああ、緑だ。霧だ、霧だ、霧だ。

亞麻が、ライ麥が、燕麥が、夏蕎麥が、菜の花が、ああ、また大麥が。

蝶だ、ああ、光つた、亂れた。たたきつけられた、急角度に。

濛々と、陰見する遙かの白樺、たも。ああ、楡、ばつこ楊。家、家、家。

見渡すかぎりの牧草。

や、汽車が來た。紫の煙、煙。

「あ、彼處です。露西亞人のパン屋の家は。」と場長さんが、Aさんの話の途中で立ち上つた。

先ほどの若い技手が、熱い熱い番茶を卓上の茶碗に注いでまはつた。

「此方にも露人がゐますか。」と私は振り返つた。

「ええ、一二家族居つてゐますがね。」

「何をやつて暮らしてゐます。」

「パンを焼いたり、牧畜をやつたり、それはおとなしいものです。」

「聖代の徳化にうるほつてゐる譯でさ。ありがたいもので。」とAさんは敷島に火を點じた。

「白系の良民ですな。元は北樺太にゐたのですがね、バルチザンの殘黨や赤化の無賴漢どもの脅迫か

ら、たうとう堪へきれなくて南へ落ちのびて来たのです。氣の毒なものですよ。それでも此方へ来てからはすつかり安心して、日本はいいと言つてゐます。尤も、露領時代からの住民もゐます、丸太式の小舎に。」

「校倉風のでせう。あれはいい。豊原のはひり口でも見かけましたが。」

「いや、豊原には舊露西亞人街がありますよ。もつと揃つてゐます。」とAさんが頼杖ついた。

「それはいい。ひとつ見に行つてみようか。吉植。」

「うむ。いいね。それからそのう、ツンドラ地帯といふのは。」

「幌内川沿岸の一圓の地帯で、つまり蘚苔類の堆積で深い幾段もの層を成してゐるのですね。下層は土に化したやりに、かう黒く、や、これがそれです。」と場長さんは後ろへ、室の一隅に据ゑた大きな硝子戸の長方形の棚を指さした。

なるほど、下部は黒く、中部はやや褐色に幾段もの脈がついて、上部は黄や青の苔の、そのツンドラの斷層面がその儘そつくりその中に飾られてあつた。

「なんですよ。そのツンドラ地帯にはフレップといふ紅い果の生る灌木が密生してゐましてね。それがフレップ酒の原料です。まだですか、紅い酒ですが。」Aさんは、そして微笑した。

「フレップ酒ですか。昨夜ちよつとやつてみました。甘いんですね。」

「でも刺戟は強いでせう。」

「え、あれはアルコールに色をつけたんだとばかり思つてゐました。あまり甘いんですからね。」

「や、生粹の樺太葡萄酒です。」

話はそれから航海中の出来事や、横斷のパンク自動車、逢阪の後家さんの安來節、これから廻らうといふ數香のオロチョンギリヤークの生活、海豹島の噂に移つた。

雨がまた一しきり窓硝子をたたいて飛沫を散らした。

ガランとした白い一室である。

「これはいい。庄亮、踊るにはもつて來いだな。」

「あつはつ、やるかあ。」

「でも歌へまい、君には。」

「あつはつはつ、歌はちよいと、そのう、困るがね。」と首を竦めて、

「それでも何だよ、踊るぐれえなら、お弟子格でやれるよう。」

「M君どうだい、踊れるかい。」

「何です。伊那ぶしですか、家庭踊でせう。」

「田邊さんの家庭踊ぢやないさ。本場の伊那ぶし。」

「踊れますとも。僕はこれでも信州人ですからね。」

「や、それは失敬、だがもう僕は酔つぱらつたよ。」

「お砂糖にかい。」

「雨にだ、ほら。」

外は濛々とした霧けぶり、銀と緑の驟雨、驟雨、驟雨。

あ、模糊として、なほ且つ白い白樺の遠景。

「さあ、諸君踊らう、踊らう。静肅に。」

音は走る。

夏は走る。走る、走る。

イワンの家

雨はまだ激しかった。

緑である、白茶である、黒である、濃鼠である、さうした自分たちの、または農場から借物のレイ
ンコート、雨合羽、軍人マントの一行五人が、案内の技手君を先に立てて、全くの濡れしづくになつ
て飛び込んだが、其處がイワン・クリロフの家の入口であつた。

「おいでかね。」

内では何やら答へる聲がした。

づかづかと技手君ははひつて行つた。私もみんなの後から、蝙蝠傘の雫をきりきり、そのままで蹠
いて上つた。尤も雑草の離々たる原つばを横切つて來たので、私たちの泥まみれの靴は綺麗に拭かれ
てゐた。

頭の禿げ上つた乳つばい赤ら面の、眼の柔和な、農民風の五十男の露助が、何か羞恥はにかんだやうな驚
きと親しさを見せながら、立ちあがると私たちへ笑ひかけた。ペチカの前にも踊んでゐたのらしい。

濃い藍色の労働服を着てゐた。横から見たら首の根つこが鼠の裸兒のやうな紅いろをしてゐた。毛むくじやらの両手だ。

技手が何か手真似で戯けた。そしたら露助が、またしやつ面を一層赤くして、「あつはつは。」と笑つた。

「まだ日本語が話せないのです。」と技手が私たちを振り返つた。

「何といふ姓ですか、この人は。」と一行の誰やらが訊いた。

「クリロフ。さうだつたね。」と技手が眼で笑つた。

「クリロフ。」

露人もまた眼で笑つた。

何と素直で善良なロスキー氣質であらう。おほまかで如何にも寛々とした無智。

クリロフの家は樺太に於ける露人の住居特有な校倉式の丸太組のそれではなかつた。極めて粗末なバラックで、ただ洋風に窓を割り羽目板をぶつけたに過ぎない。

私は見まはした。

入口の一室はほんの六七疊の板の間で、突き當りは物置らしい開き戸になつてゐた。右手の窓下にはフライ鍋スープレ鍋、瀬戸びきの大きな杓子、薬罐などが雑然とぶらさがつてゐる。これが臺所だ。

セメントのペチカは右の室へ通ずる澁がちの廉更紗のカーテンの傍に造りつけになつて、そのまた

隣に、これも粗末なテーブルが一つ出しつぱなしになつてゐた。ほかほかと焼けかかつたパンの香ひがして、ペチカの焚き口には赤い火の反射が幽かにはみ出してゐた。

外にはまだ雨の音がしてゐた。

「や、パンだな、焼いてるな。」

と言ふと、イワンがふつと私の方を向いた。

指でちよいと、ペチカの方を、そして私が茶目ると、赤いおやぢさんがぼんぼんと片手でその首根つこを叩いた。

「あつはつはつ。」

醫專のMとTがカメラを胸へ、そつと俯向いて、前へ出ると、

「デヤメデヤメ。」

慌てたパン屋さん、大きく両手を振つて、すぼりつとカーテンを後ろ向きにもぐりにかかる。それをどかどかと追つて、みんながはひつてみて、また見まはした。其處が食堂、いや、寢室らしくもある。木造のほんの型ばかりのベッドが、奥への通路の赤い更紗のカーテンの傍にたつた一つ、ベッドには白い藁蒲團に白い枕に白いカバー。

「簡素なものだな。」

だが向つて右手の硝子窓には黄の赤い蘭科の花の鉢が一つ、大きな素木のテーブルの上に載せてあ

つて、その怪しげな生物が、またこの大陸風のこの雨の日の外光を思ひきり吸ひふくれてゐた。
燃えあがる焼點。

「ツイトーフ。カムチャッカ蘭です。」

と、技手が私に答へた。

大きなテーブルの両側にはベンチ風の薄汚れた木の腰掛が一脚二脚、クリロフの一家はここで、互に向ひ合せて、さて、スープの鍋底を大きな杓子でひつ掻きまはし、パンをもぎり、赤酒を、また牛の髓骨をしやぶるらしい。そこでベッドは赤い爺さんのにきました。たふたふと大きくて、長くて、そしてびたりとくつつけた、萌黄模様の壁紙には染みがある。

その上部にこれはまた浅草物の石版畫。

何であらうと、仰いで見ると、これは驚いた。遼陽占領奥軍大奮闘の圖、龍宮風の城砦が今まさに炎上しつつある赤と黒との凄しい煙の前面で、カーキ服の銃劍、喇叭、聯隊旗、眼は釣り上つて、齒を喰ひしぼりの、勇猛無雙の突貫々々、やあ、萬歳々々のあつちこつちでは黒のコサック帽の、緋の上衣の、青ズボンの、髯むじや露助の助けて助けてに眞向、拜み討ち、唐竹割り、逃げる腰から諸手突き、ウーラーウーラーも蟲の息でへたばる背をば乗り上げ、蹴立てて躍進、傳令使だ。

「ほほう、露助滅茶敗けぢやないか。」

クリロフのおやぢ、吞氣なものだ。あつはつはとまた笑つて、しきりに手ばかり振つてゐる。

「ヂャメヂャメ。」

と、奥のカーテンをまくつて、またのろくさとかぶつて消えたところで、どかどかと私たちだ。そこで後から睨いてはひると、また見まはした。

十七八の金髪の娘が一人、向うの隅つこに身をひそませてゐたが、何か青い毛糸の編針を動かし動かし、キツと此方を見た。瘦せぎすの鼻の高い、それでも飾らぬ野生の美しさはその眼にその頬に蓄んでゐた。

そこで、みんながたじたじとなつた。

ふつと後ろを振り返ると、私は顔から火が出さうになつた。

聲もせぬ幽かな姿。

黒い頭巾をかむつて、黒い服をつけて、それはまことに白皙の、髪も眉も睫毛も、その太い鼻も、頬の、額の深皺も雪のやうな、何か品のよい老婆が、壁際の白いベッドに白いクッションを高く、下半身に白い薄手の毛布を引きあげて、さうして白い兩手をその上に組み合せて、じつと此方を見入つてゐた。

何といふ無作法な旅ごころで私たちはあつたらう。私はまだ噪いでる一同の後ろから、この不意な、さうして無遠慮な異郷人の闖入行爲を立ち竦んで恥ぢねばならなかつた。

閑かな窓硝子からの光。濡れしづくの硝子の内側には紅や赤の草花の鉢を一鉢、小さな脚高の花卓

の上に置いたのが、そのまはりが鮮新な、しかも却つてうら寂しい氣分に明つてゐた。

白哲の老婆(さうだ、もう八十にもとどきさうな。)は私たちを見ると、幽かにその白い脛毛をしぼだいたいた。さうして、何の聲をも立てなかつた。

諦めはてた老いの心の姿をまさしく私は見た。

老婆の青い瞳は深かつた。

どうせ彼女らは無智な農民には違ひなかつた。恐らく本國の土地も曾て踏んだこともあるまい。沿海州から北樺太へ、北樺太から國境を越えて、どうにかパルチザンの殘虐から逃れおほせたものであらうか。二十何年前の祖國と日本との戦争なども無論知つてゐさうにもなければ、ロマノフ家の稜威を一朝にして衰へさせた、かの大敗北の噂話でも或は聞いたこともなかつたであらう。だからこそ遼陽占領日軍奮闘の石版畫の額などを掲げて安心してゐるのであらう。流れ流れて日本の領土にまで移り住んで、そしてまだまだ住みついたといふでもなく、言葉も通じなければ、辛うじてしか日常の糊口すら凌げないといふ一家である。日本の國と人とに今はひたすら取り縋つてはゐるものの、由來小悪で狡くて、勝つては傲り、弱みにつけこみ易いのが日本人のある階級の特性である。善良で無智とみると何處までも層にかかる。だから果して末々までも頼られるかである。

老婆は諦めはてた心の幽かな姿で、幽かに白い脛毛を合せてゐる。

その老婆の枕のうへには、私は見て度しくなつた。金の十六瓣の菊の御紋章が光り、今上皇后兩陛

下の御尊像が並び立たせられた石版刷の軸が一本、まことにあり難さうに掛け垂らしてあつた。そのそよともせぬ閑かさ。

と、また、向うの壁と壁との隅、その高い上部にぶちつけた三角の小棚には何が恭々しく飾られてあつたか。

ニコライ皇帝、

その皇后、

手札型の眞鍮縁のその御眞影こそはあはれであつた。

私は黯然とした。

「撮らしてください、ね、いいでせう。」

醫專の美少年のMがしきりに娘のナターシャ(さういふ名だつたと思ふがちがつたかも知れぬ。)へせびつてゐた。ナターシャは顔を赤くして反射的に編針を持つた片手をうち振つてゐた。氣の少し強さうな、だが邪心のない素朴さが彼女の瞳に見えた。

どかりと、ペチカの方で、テーブルに何か投げ出す音がした。

黄がちの鼠の鳥打帽に鼠の服をつけた、眼の白つぽい、鼻の高い十五六の少年が其處には突つ立つてゐた。何と長い脛だらう。

呼賣の露西亞パンの函を紐ながら首からはづして、快活に此方を見たところだ。

「歸つたね。」

と、技手が聲をかけた。

少年はただ笑つた。

それから私たちもペチカの前へ引き返すと、娘のナターシヤも蹠トキカイいて來た。馴鹿トキカイのやうな軽い身振だ。

「君の名は何といふの。」

「イワン。」

「さうか、イワン、いい名だね。」と私は微笑した。

いかにも露助らしい名だと思へた。イワンの馬鹿といふことがある。だが、この少年なかなか敏捷はしつい。

「君、ここにイワンと書いてくれないか。」

誰かがそのノートを突き出した、鉛筆といつしよに。少年は奪ふやうに手に取ると、窓際へ寄つて、何か走り書したと思ふと、今度は急に躑つきつけるやうな恰好をした。

「ナターシヤ、君もひとつ。」

ナターシヤはほつほと笑つた。さうして頤ほを突き出すと、叱るやうな眼をした。それでも面白さうに鉛筆の心を嘗めた。金髪がふさふさと揺れた。

「小父さん。」とまたMがやると、

「ヂヤメヂヤメ。」で、手を振つた。

「ぢやあ、撮らしてくれないか。」

爺さん、いよいよ赤い顔をして、また首根つこを叩いた。さうしてイワンとナターシヤと自分とを指さした。

「ぢやあ、みんなでいいぢやないか。」

「ヂヤメヂヤメ。」で、また尻込みして了ふ。

「ぢやあ、家を映さう。」と私たちが外へ出ると、今度は硝子窓を開けて、内からさも映してもらひたさうに赤いこにこ面こで差し覗くのだ。

イワンの顔も出た。

ナターシヤの顔も出た。

「なあんだ。ぢやあ、並びたまへな。や、さうぢやないんだよ。小父さん眞ん中だ。そら、そのとほりそのとほり。」

醫專がひとり、雨だまりの草つ原からうれしがつてると、赤い露助のおやぢさん、いよいよ固くなつて、それこそ直立不動の姿勢になる。さうして物珍らしさうな、また、極りの悪さうなおどおどした眼つき。

なんと善良な露助だらう。

なんと無邪氣なのつぽ。

なんと素朴な。

恐らく、生れて滅多に寫眞など撮つてもらつたこともなかつたかと思はれた。

カチリ。

「よし、濟んだ。ありがたう。あ、もういいんだよ。」

「寫眞送るか。」とイワン。

「送るよ。」

イワンがナターシヤを突き飛ばしさうにした。ナターシヤはイワンの肩を撲つた。

雨はもう霽りかけてゐた。

すかんぼ、すかんぼ、紅更紗。

*

小沼の驛へ歸る途々も、私はクリロフ一家のことを考へてゐた。

かはいさうにみんなが氣が弱くなつてゐる。郷に入れば郷に従ふのが最も滞りがなくてよいかも知れぬ。然し果して彼等はいつまでも今のパン屋で暮らしてゆけるものか。たいして信じがたいとは感

じながら、強ひても取り纏らないでは安んじてゐられない流浪者の境遇こそはまたとなくあはれに思はれる。といつて赤化の北へは歸れない彼等である。周囲の日本人に對する複雑した異種族の感情を抑へて、兎も角生きてゆかねばどうにもなるまい。それともまたヌーボの露助のことだ。私が考へるほどのものでもないかも知れぬ。案外に野呂間で、今日を今日として悠々と楽しむ心も一面には持つてゐさうにも思はれる。だが、あの子供らしい「ヂャメヂャメ」にも何かしらの暗い哀調は籠つてゐた。

通へ出ると角に呉服屋兼小間物店があつた。私は麻のハンカチーフを買つた。連れの庄亮はゴム足袋にゲートルを買つて、穿くと、ぐるぐるとその片足に巻きだした。

店には火鉢が二つ。火がカンカンとおこしてあつた。樺太は八月でも雨のふる日はうそ寒い。

「あのクリロフといふ露西亞人の家がありますね。」

「へい、ございます。」と瘦せぎすの主人が答へた。

「あれはどうかやつてゐますか。」

「ええ、パンを焼いてゐますですが、相當にやつてゆけるやうでございますよ。」

どうしたものか、私は主人の後ろに積み重ねた紺足袋の眞鍮の小ハゼが眼に沁んで仕方がなかつた。

驛へ行つて見ると、豊原行の臨時列車はまだ仕立中であつた。

朝早く大泊から東海岸の榮濱まで直行して、またこの小沼まで引返した觀光團の一二等客は、その

合間に雨中を農事試験場の參觀に出かけたといふことであつた。

待つてゐると、ぼつぼつと歸つて見えた。

臨時列車も野天のプラットホームに這入つて来た。

私たちは乗り込んだ。

だが、一行の全員を收容するまでには、なかなか間がありさうに思はれた。

「露人の家がありますよ。」と教へると、「や、それは。」と退屈まぎれに飛び出す人々もあつた。

見える、見える、あのカムチャッカ蘭の窓が。

雨は霽りかけたが、まだ露人の家のあたりの空は薄鼠色にうち濕つてゐた。いや、もう日が暮れかけても来てゐた。

「や、来た来た。」

と、誰やらが叫んだ。

少年イワンであつた。首から黄いろい紐を、前の函には、それこそふかし立ての露西亞パンを山盛りにして、活潑に改札口を出ると、ちよいと横向きの白い頸すぢを見せた。

レールが間に四條。じつくりと枕木も小砂利も濡れて、右も左も椴松の林が遠い、遠い、遠い。

「あれです、露西亞人の息子は。」

とても物好きな観光團です。それはといふので、それに少々腹も空き加減の、恰もよしといふこと

ろで、乗降口からレールへ飛び下りると、また駈け上つて、

「おい、パン。」

「おい、パン。」

「おい、いくらだ。」「おい。」で、一時に眞つ黒に群つて了つた。

イワン少年の片手の銀、銀、銀、銀。

瞬く間に賣切れ、そこで、イワンはまた小躍りして、飛ぶやうに後ろを見せた。

またやつて来た。また一齊に群つた。

萬歳、賣切れ。

ピーと汽笛が鳴つた。

イワンはぼかんと向うのプラットホームに突つ立つてゐた。胸の空函を反らし氣味に。

「左様なら。」と此方で帽子を振つた。

イワンはちよつと顔を赤くした。さうして特に見知り越しの私たちの眼と眼とぶつかると、莞爾として片手をあげた。

「左様なら。」

そしてまた鳥打帽をつかんだ。そしてまた顔を赤くして笑つた。振つてる、振つてる。

豊原舊市街

見えた、見えた。露西亞人街だ。ほら、丸太小舎だ、

あ、柳、

窓、

窓、

窓、

あ、赤だ、白だ、紫だ、花だ、

素敵だ、

流れだ、驚だ、

おや、鶏だ、

さあ降りようと、私たちは自動車から早速に飛び降りた。

白樺。

白樺。

白樺。

汽車のカダンスが速くなった。

朝の八時頃、まだ昨日の雨の名残がどこやらに薄すらと籠つて、しつとりとしたいい香氣の空氣であつた。

大通北一丁目二丁目三丁目四丁目と出て、やはり北へ向つた幅廣の白い一筋道が、元露西亞人の住居したといふ舊市街ウラジミロフカへの往還である。私たち二三人は博物館の參觀、公會堂での觀光團歓迎會へ臨む前のほんの小閑をぬすんで、その舊市街見物と出かけたのであつた。

橋を一つ、また一つ、それから、やあ、此處だ此處だとなつた。

道の左側にはささやかな流れがあつた。私はその流れに沿つて、また立ち留つて見入つた。

まつたく校倉式の丸太組の露西亞人の家々は簡素で、また幽雅で、しかもいい寂色に古びてゐた。純粹なものにこそ眞實の意味の美しさがある。日本の古い百姓家にしてもその茅屋根の勾配といひ、張出しの廂といひ、土間といひ、煤びた大黒柱といひ、外庭といひ、いかにも日本固有の雅味がある。

それにしても、この原始的な丸太組の壁は、また飾の無い急勾配の板屋根の形は何と言つていいだらう。硝子窓の割り方もいかにも素朴で、それにどの家のどの窓にも何か色彩の濃い淡い草花の鉢を見せてある。流れに沿うた裏口のポーチも板張の平面で、それに二三段の無造作な階段、水ぎはの緑の草、盛りの紅葵、或は向日葵、様々の夏草の花壇、柳の根といつた風である。空には奥ゆかしい廂の上に枝垂柳が垂れてゐる。かうしたのが露人の百姓家だと思ふと、この頃の新開地の日本家屋の醜

さがつくづく不快でたまらなくなる。樺太の原生林に、露人はその始めまつたくいい生活をしてゐたにちがひない。

私たちの第一に訪ねた家は殊に廂が深かつた。イワン・チャハンスキーと標札が出てゐた。無論農家であつた。母家つづきに牛舎があり、中庭を隔てて、一層古びて頽れかけた茅舎の穀物納屋もあつた。その間の庭の突き當りに細丸太の木柵があり、その外は野菜畑やクローバーの原つばになつてゐた。

鶏が、その庭に、純日本種の鶏や矮鶏がコヨ／＼と^{あさ}求食り求食りしてあちこちしてゐた。それを見て私は何とない微笑の頬にのぼるのを禁じ得なかつた。

「鶏が遊んでゐる、日本の鶏が。」

私はその廂の下へはひつて案内を乞うた。

戸口は開いてあつた。

内は二室ぐらゐりかなささうであつた。その取つつきの入疊ばかりの板の間の中央に、何か色の交つた白地の頭巾をかぶつたお婆さんが一人、古びた素木のテーブルに大きな木の盆を据ゑて、黄ばんだ麥粉をしきりに兩手で捏ねかへしてゐた。そのお婆さんが眼で笑つてうなづいたので、私たちもはひつて行つた。うなづいて目禮して。ただ言葉が通じないかと思つたので、ただ黙つて笑つて見せた。向うでもきさくに笑つて見せた。

川沿ひの窓際にはやはり明るい草花の鉢を置いてあつた。その硝子戸の外にも紅玉葵や黄蜀葵が咲き盛つてゐた。

外庭に向つた一つの窓の前のテーブルには何か白いきれが擴げられてあつた。洗つて乾かした洗濯物らしかつた。中婆が横向きに木の椅子に腰かけて、何か繼ぎ剃ぎしてゐた。これも明るい頭巾をかぶつてゐた。二人ともよく肥つてゐた。

極めて簡素であつた。

奥寄りの壁際には、これもお粗末な木のベッドが寄せてあつた。薄紅色の浮織のクッション、白い蒲團のカバー。

それだけ、

や、まだあつた、白い笠の電球。

麥粉は黄色く、さうして白く輝いた。

籠^すえかかつたトマトのほひがした。

茶の赤い牡鶏が一羽戸口からはひつて來た。閑かなその呼びごゑ。

私たちは目禮して外へ出た。

二人のお婆さんはそれまで何一つ言^もをいふでなかつた。だが、温かな親しさと、幼い桃色の上氣と、軽い好奇心と、何かの反射的興奮とが彼女たちに見えた。

牛舎は空であつた。主人が牽いて出たらしかつた。

雨あがりの朝の光線が、今度ははつきりと穀物小舎の屋根の影を地上に映した。

「かうした百姓家では牧場も持つてゐなさうですがね。」と、私は白髪の和製のタートルさんに訊いた。

「や、何でさあ、最寄りの原つばへ連れて出るのでさあ、このあたりはまだ原つばかりですからね。」なるほど到る處の夏草であつた。

私たちが外の板橋へかかると引きちがひに、同じ觀光團の誰彼がどかどかと踏み込んで來た。

この悪趣味の連中が、あの二人の老婆たちの幽かな半日の楽しみを驚かし、あの無作法で何か憤らしてくれねばよいかと、私は振り返ると、右手を振つた。

「や、こりやひどい家だなあ。」と言ふ銅鑼聲が後ろにした。

通へ出ると、同じく丸太組の家が、それももうよほど廢頽してゐる軒竝が向う側にも續いてゐた。日本人の家も交つてゐた。

その中に、母家の外に牛舎か何かの建増をしてゐる露人の一戸があつた。

肥つた年輩の父親とその息子らしい二人の少年が、まだ骨組ばかりの屋根の上にあがつて、専念に新らしい不足の垂木をぶちつけてゐた。父親は鼠の鳥打帽に藍色の勞働服、息子たちは白っぽい鳥打帽に白のシャツに白ズボン下、夏はまことにその屋根の上の新材木と輕装の三人に光つてゐた。

ところが、いつの間に群つたものか、赤や白の薔薇の徽章を浴衣の襟、或は背廣のボタンの孔に挿んだ観光團の數十人が、往來から盛んにカメラを向けて騒いでゐた。

それのみでない。づかづかとその母家にはひり込み、納屋をのぞき、牛舎へ廻り、ほとんど傍若無人の限りを盡してゐた。

屋根の上の露助は、初めは不愉快らしかつたが、まだ黙つて知らぬ顔で見てゐた。それがいよいよ一齊にその足元からカメラを差し向けられると、堪へかねたか、赤い顔をして、思ひきり大きくその片手を振りまはした。それでも幾十のカメラはひるむ段でない。

パチ／＼／＼／＼／＼パチリッである。

や、まだ、まだ。

「寫眞泥棒。」

と、一人の息子が憤怒を飛ばした。純な少年のこの憤怒はまた、彼の白面を朱のやうにわななかし

た。と、父親の露語の怒聲がまた極度に爆發した。

下では、一時たじたとつたが、

「なんや、あれが馬鹿野郎いふのかいな。」と一人が、ひひと笑ふと、連れて、誰彼がまたどつと噓し立てた。

上ではもう狂氣のやうに逆上した。

「泥棒、寫眞泥棒。」

「歸れ、くそ、畜生ッ。」

「がつがつがつ、ぶるぶるぶる。」

下では、

「いよう、七面鳥。」

恰も、この時、粗服粗帽の一高生らしいのが通りかかつた。

「やれ、やれ、負けるな。」と上を向いた。さうして、「一體何だ君らは。歸りたまへ。亂暴も程がある。」と立ちほだかつた。

「やれ、やれ、俺が承知しねえ。くそッ。てめらたち何だ、何しにうせやがつた。」

隣から日本人の老百姓が飛び出した。息をきつてふるへてゐる。

「しつかりやんねえ、××スキー。」とまた一人の日本の百姓が躍り出して來た。

「止したまへ。諸君。止したまへ。」

と私たちも手を振つた。何と恥かしいことだ。

「此奴ら、朝つばらから入れ變り立ち變りだからたまらねえでさあ。無作法過ぎますさあ。それに勝手に家の中は荒す、寫眞は撮る。いくら何でも辛抱がしきれませんや。」と、また一人の日本の百姓が、

私たちに訴へ初めた。

まつたく、弱者と見て傲り、群集を頼み、旅先を茶にして、彼等観光團の俗悪者は不法を不法と思はず、無禮のありつたけを盡したに相違ない。無邪氣といへば無邪氣かも知れぬ。然し、かうした性情は日本人の一つの特性ではなからうか。だが、また何と親しいウラジミロフカの街の日本と露西亞の百姓たちであらう。

私はしみじみと眼がしらが熱くなるのを覺えた。

「寫眞泥棒ッ。」

「しつかりやれ、アリョーシャ。」

樺太神社

十六日薄暮、私は二三の連れと、この豊原の東郊は旭ヶ岡の樺太神社に詣でた。しつとりとした雨後であつた。坦々とした幅広い道路を、いかにも自動車のタイヤが軽く親しく滑つて行つた。大鳥居の前で下りると、清楚な白い石疊の道を、また石の段を眞つ直ぐに、私たちは登つて行つた。その兩側の土の色も芝生も落葉松の林も石燈籠も、見るものがことごとく雨をふくんで、また何ともいへぬ緑と白との涼しさをしたたらしてゐた。殊に後ろのなだらかな丘陵の緑は明るかつた。私はつくづくと思つたが、この八月の樺太の爽やかさは、とても内地に見られない色と香氣との新鮮味を持つてゐる。これは驚くべきものだ。展望がまたひろびろとして、しかも清らかで新らしくて、まことに植民地の神苑だと感じられた。祭神は大國魂命、大己貴命、少彦名命の三柱だ。神殿の前に立つと、私たちは皆濡れしづくの麥稈帽を脱つた。

神殿はもう薄紫の暮色がたちこめて、奥殿に何か幽かに光るものが神々しく拜まれた。ほの青い装束のけはひもした。

「上つてみませう。」と一人が言った。

私たちの靴の紐は濕つて解きにくかつた。やつと解いてから、木の階段を上つた。烏帽子姿の神官が、神前の供へ物を、その素木の三寶を一つ一つに片づけてゐた。奥殿へ通ずる扉を、それから閑かに閉して、薄ものの緑の、昆蟲の翅のやうな装束をまた幽かに光らして下つて来る神官に、また一人が呼びかけた。

「あの扉は何と申しますか。」

「中門です。」

まだうら若い、眼鏡をかけた人であつた。

その人は黒い烏帽子を前かがみに、私たちの前に、やや斜めに跪いて、審しげに、また親しさうに此方を見た。

「大國魂命と大國主命とはちがひますか。」とまた一人が訊ねた。

「はあ。」

「としても、やはり出雲系の神様でせうな。植民地の祭神はよくさうのやうで。」

「さうだよ、君、植民政策としては最も當を得てゐるかも知れん。」とまた一人が言った。

「だが、出雲系と天孫民族とはどうしても僕も同種屬ではないと思ふ。素盞男命からして併合政策として、日本神話の大立物に祭り上げて了つたものらしいな。」

「さういふ見方もありますね。」

「だから、どうしても天照大御神を中心に、お祭するのがほんたうでないかと思ふ。植民地にしても、日本である限りはだよ。」

「臺灣は。」

「北白川の宮様を合祀してあります。」

「なるほど。」

ひっそりとした四邊であつた。蕭やかな、光の外の光と、影の中の影とが相纏れて、それらが物の隅々にまで柔かにうち燻んでゆきつつあつた。

このほのかさは、この和御魂にぎみたまのかをりは、また荒御魂あらかみたまの融和は。この神々しさは。この幽けさは。いい時に參つてよかつたと、私は思つた。みんなもさう思つたにちがひなかつた。

凡てが、安らかな、また物がなしい自分たちの息づかひを聴いた。

だが、これが樺太であらうか。この親しさは、はるばるとした旅情ともちがふ。きようきよう。

「あ、あれは何です。」

「ほととぎすです。」と烏帽子が空を仰いだ。

空はまだ幻燈のやうに青かつた。

「あ、あの木は。」

「ななかまどと申してゐます。」

そのななかまどは紅葉しかけてゐた。
流石に秋の早いのにも驚かれた。

豊原よりの消息

Y君。

この豊原、舊ウラヂミロフカの夏はいかにも高原地の初秋らしい風の涼しさをみせてゐる。こころの丘陵は今が季節の新緑を輝かしてゐる。それなのに早や紅葉しかけた木々もある。

観望の壮大なことは驚く。それに市區の井然たることは、未だ曾て内地の都市に見ぬ鮮かさだ。札幌はこれ以上に美しいといふ話だが、これは歸りの楽しみにして置かう。

旭ヶ岡の樺太神社から瞰下した豊原の夜景はまるで緑野の中の正しい灯の碁盤目であつた。

私は南國人だ。北方の陰暗、深刻、さうした私の藝術に缺けてゐるものをこそ求めて、私はこの北方に來ることを楽しみにしてゐた。が、來て見ると、案に相違した。あまりに新鮮で爽快過ぎる。樺太はやはり冬に來べきところだと思ふ。私はここで童謡はできるかも知れないと思へるが、北國風の民謡は到底作れさうにもない。夏は南國だ。熾烈で、あの深刻な惱氣と棄ばちの氣分は。

この八月の豊原風景はまさしく貴公子の緑の雨外套レインコートだらう。

だが、この日旅館の女中はどうしたといふのだらう。この豊原一の宏壯な旅館だからかとも思つたが、まるで藝妓のやうな美服を著、粉黛してゐる。内地の何處の旅館に泊つたつてこんな事はない。一々嬌笑する。この家の旦那といふのは内地の代議士ださうだ。

それから庄亮君が名刺屋を呼びつけたよ。法學士、鐵道會々員、新聞同盟外報部長といふ肩書附で、本宅は青山の親爺さんのところで電話番号までチャンと刷らせると言ふのだ。明朝までにととのへろだ。脅かすと言ふと、「なに、これでいいんだよ、見てゐたまへ、あつはつはつ。」と豪傑笑ひをしてのけた。僕も忘れて來たので、ついでに名前だけのを頼んだ。

それから洋品店に電話を掛けさせた。縞子張りの蝙蝠傘三圓五十錢のを、これに限る、これを買へと言ふのだ。それで僕は買った。絹張りのステッキ蝙蝠傘などは駄目だと言ふのだ。まつたく僕にも似合はないからね。國境の安別で、ひどい吹きぶりにたうとうへし折つて了つた。

この二人が、今朝、公會堂の觀光團歡迎會のすぐ後から、幌馬車に乗つて、豊原の西郊の追分といふ部落へ散策したと思ひたまへ。僕たちは一昨日眞岡から豊原へ二十里の原生林の横斷を果したが、六度もパンクして、たうとうこの追分口から滑走してはひつて了つた。其處には紅い葵が咲き、向日葵が盛り、西瓜や鶉豆の花、唐黍の毛などがそよいで、それに露西亞人の丸太組の家もところどころに残つてゐるし、異國風の實にまた新鮮な風景だつた。それに大きな長柄の鎌ですういすういと燕麥を刈りそいでゐた百姓の手つきが何ともいへなかつたのだ。で、あれをもう一度見に行かうとなつた。

庄亮、あはよくば自分でも刈つて見たい意氣込みだつたのだ。

幌馬車でちりちりんだ。程よい道の曲り角で、下りると、私たちは子供のやうにそこらの花畑や露助の家や農家の背戸などを覗いてまはつた。それからずんずん一本道を河楊の竝木に添つて、この前見た燕麥の畑まで出て見たが、其處はもうおほかた刈られて了つて、例の長柄の草刈鎌も百姓の姿も見られなかつた。亞麻畑にはまだちらほらと可憐な紫の花が残つて見えたが、日は暑くて、耕作馬車の軋り一つきこえなかつた。そこで私たちは燕麥の刈り跡に新聞紙を藉いて、寝ころんだが、雲は白いし、いい機嫌で氣焰のあげつこだ。

と、庄亮が、「君。」とめくばせをした。

つい近くの道路を誰だか二人聲高に話してゆくのだ。

「あれはアイヌでせう。一人の方はよほど文化的教養を受けたアイヌらしいです。」

「あつはつはつ。こりや驚いた。」と庄亮が頭をかかへて了つた。

「おれはアイヌだとよう。」

「ふふつ、おれは文化的教養を受けたハイカラアイヌかい。」

庄亮は例の鼠の縮の棒縞に、股引の、尻端折の腰手拭ときてゐるだらう。僕は黒のアルパカで、頭にはハンケチをかぶつてゐた。二人とも三圓五十錢の蝙蝠傘だからな。それに庄亮の肩書附の名刺だつてまだ出來て來ないのだからな。

歸りはてくりてくり歩いた。途中で日の出温泉といふのが眼についたので、一汗流して行かうとなつた。はひつてみると鐵澁色の鑛泉で、それも沸し湯だつた。上つて浴衣を借りると、實に薄汚なく、てくしゃくしゃしてゐる。一室に通してもらふと、生新らしい廉物の疊のほひと木材のほひだ。敷島をと呼んでも無いといふ。ビールとなると、顔いっぱい赤い濕疹のふき出た二十五六の内儀が、おなじく赤いぶつぶつの乳房をはだけて、怪しげな赤ん坊の頭を片手で吊り氣味に強く押しつけて、それでお盆に澤庵と一緒に載つけて出て來た。そのビールも氣が抜けて腐れてゐた。

どうにも氣持が悪いので、そこそこに飛び出したが、いつたいどういふ家なのだらうな、何でも極めて閑散なものだつたよ。

それから、遊廓の大通へかかると、向うの木橋から、白い服の、そして胸高な青の袴の朝鮮の女が楚々として光つて來た。華魁なのだ。

廣つばがあつて、それからが、プカ／＼ドン／＼だ。曲馬の天幕の前には三角耳の眼の細い象の子が、赤と金との鞍掛に飾られて、まだ初々しい灰色の曲り鼻をあげあげ客呼びしてゐると、それと對つて、白狐とも化猫ともつかぬ繪看板の、「これはこの度奥州氣仙沼は何とか何兵衛の女房お何が生み落しましたる血塊童子でござい。代は見てのお戻り、しやい、いらつしやい。カチカチイ。」

日本といふ國は何處へ行つても靖國神社式の見世物で持つてゐる。祭や縁日といへばすぐにこれだ。初めて上京した時、東京も田舎だなあと驚いた事もあつたが、この樺太ではやつぱし此處も都だなあ

と感嘆された。

それかといつてまた、先月は本居長世君が令嬢たちを連れて見えたさうだ。童謡音樂會は大入だつたといふ。

豊原は東京の延長としか思へない。だが、此處の場末の盆踊は安來節でやるやうだ。(後略)

木の扇

坊や。

パパは豊原といふ樺太でのいちばん賑やかな町へ来ました。眞岡といふ町からです。マウカといふのは美しい波の上といふことだそうです。その美しい波の上から、坊やの好きな自動車に乗って、二十里の山道をブウ／＼／＼と飛ばして来ました。五度も六度もパンクしました。それでも転覆はしませんでした。馬の背たけよりも高い路の林もありました。アンデルセンのお話にある白いお家の蝸牛や黒いお家の蝸牛もみました。みんなアンテナを架けて、「J O A K、こちらは東京放送局であります。」あれがよく聞こえるさうです。坊やは虎杖を知つてゐるでせう。小田原の山に生えてゐる虎杖の花は薄紅くてちらちらしてゐたでせう。樺太のは葉が大きいのです。それに莖が高いのです。藪のやうに繁つてゐました。

それから、坊やはよく坊やのお國はお菓子の木や蜜柑の木がどつきりあるんだと言つてゐましたね。その坊やのお國は何處にあるか知つてゐますか。パパも樺太まで来たけれど、まだ見つかりません。

やつぱりママさんのところにあるのでせうね。見つかったら無線電信で知らして下さい。パパさんはこれからまたお船に乗つて遠い遠い北の方へ行くのです。海豹島といつて、おつとせいが黒山のやうにゐたり、ロッペン鳥が雪のやうに翔けてゐたり、それはお伽噺にあるやうなおもしろい島があるさうです。それからフレップといふ紅い實やトリップといふ紫の實のいつぱいに生つた広い野原もあるさうです。若しかすると、坊やと同じやうな子供が、パパと言つてその中から飛び出して來るかわかりません。篋子ちゃんも來てゐるか知れませんが。

坊や。

パパは今日、この町の博物館に行つて見ました。その博物館に大きな木のお扇子がありました。棕櫚の葉のやうに大きなお扇子です。そのお話をしてあげませう。

その大きなお扇子はいろいろの木を板を紐で綴つて、お扇子にこさへたのです。その木の板はみんな薄紅肉色でみんないにほひがしてゐます。黒とど、赤とど、えぞまつ、おにぐるみ、たも、あかだも、やちだも、おんこ、からふとやなぎ、いたやかへで、しらかんば、からまつ、にれ。みんないい木です。みんな樺太の山や野に生えてゐる木です。それで、その木のお扇子を嗅いでみると、ほんとに樺太の山や野つ原がいにほひをして動いてゐるやうな氣がします。

それからまだ、樺太にはいろいろな木が繁つてゐます。

どろやなぎ、ばつこやなぎ、きぬやなぎ、さんちん、にはとこ、からふとななかまど、たかねなな
かまど、しうり、やまはんのき、りんご、まるめろ。
まだまだ、いくつも木のお扇子がつくれます。

坊や。

博物館にはまたいろんな鳥や小鳥の剝製が、硝子戸棚の中に飾つてありました。

えぞせんじう、えぞおほあかげら、くまげら、しめ、赤ばら、えぞやまどり、しまえなが、のびた
き、かけす、きびたき、るりびたき、しぎ、うみがらす、つつどり、きんくろはしら、かるがも、こ
ほりがも、おほせぐろかもめ、おいらんかもめ、うみしぎ、ちどり、うのとおり。

見てみると、ほんとにみんなが生きてゐるやうです。かうしたいろいろの鳥や小鳥が樺太の山や海
に飛んだり啼いたりしてゐます。みんな愉快にみんなが子供のやうに遊んでゐる樺太の山や海のこと
を考へてごらん下さい。きつと、坊やも踊りたくなるでせう。

まだまだいろんな小鳥がゐます。

坊や。

それからまた、博物館にはいろんな獣の剝製もあります。

大熊、ヒクマ 山猫、とらはんめう、むささび、麝香鹿、トナカイ 馴鹿。

海で泳いでゐる獣には、おつとせい、あざらし、おほあしか。

おほあしかなどは熊よりも牛よりも大きい海の獣です。うわうわうと吼えます。

坊や。

それから、お魚さかなでは、いはな、かはかじか、かはひらめ、すなひらめ、さめ、ます、さけ、にし
ん、などが泳いでゐます。

見てみると、眞水や潮水の中で、ほんとにみんなが生きて泳いでゐるやうな気がします。

ほら、坊や。よくきこえるでせう。谷川の音や、海の潮鳴の音が。

みんなが、坊やの方へ跳ねたり、駈けたり、泳いだりして行つたら、どんなに愉快でせう。

まだまだ樺太にはいろんな獣やお魚がをります。

坊や。

さあ、おやすみ、坊やのお國で坊やのいいお夢を御覽下さい。

とんとり、とんとり、とんとりとん。

笛

樺太は中知床岬の東、渺々たるオホーツク海のただ中、見渡すかぎりには圓い水平線と氷雪、
燦された反射光、

ああ、日の小さい小さい空。

笛だ。

あ、笛が鳴る。

嚙啞と、起つて響くその音いろ。

何かしら薄ら寒い、いい風である。明るいやうでも暑り易い日射、照つてもまた光り耀かぬ黒い
波濤の連続、見れば見るほど大きな深いうねりである。

その中に笛の音いろが澄みつつある。

吹いてゐるのである。誰が吹くのか、その笛の音は、ただ一色に響いてゐる。
空と海との、この焦点。

ひようへうふれう、れうふれう。

まさしくお能の囃子である。

私は私の船室の前に、その白い壁に凭れ氣味に、籐の腕椅子によりかかつてゐた。

私の右にも左にも同じやうな籐の椅子が並んでゐた。人々が腰かけてゐた。

帆綱の影、潮じみた欄干の明り、甲板の板の目、鑲の軋り、白い飛沫、淺葱いろの潮漣。

うねるとも見えぬ果てしもないうねりの丘陵。

はろばろとした波濤の疊みである。

宏大な海、小さなのは私たちだ。

笛の音は中甲板の巨大な橋の下、三本立つた白茶に藍の開き耳の、これも大きな通風筒の向う陰か
ら響いて来る。

笛

「あれは誰ですか。」

「Iさんです。あの頬髯のある。」

「何を吹いてゐるのです。」

「羽衣でせうか。」

さうだ、天人の五衰を吹いてゐるのだ。現實の切なさだ。いや、夢見る人の寂しさである。

「うまいのですかね。よくやつてゐますね。」

「うまい方でせうよ。もう十年から稽古してゐると言つてゐました。舞臺にも出るやうですよ。」

「金春ですか。」

「いや、寶生でせう。たしか。」

「玄人ですか、あれで。」

「素人稽古の時はよく褒められたが、本氣に遣り出してから以來、さつぱり褒めてもらへぬと悄氣てゐましたよ。そんなものでせうかね。」

「そんなものでせう。修業ですからね。お能の笛だけにはかぎりませんよ。」と、私は初めて口を開いた。

「この頃臆していけないと言つてゐました。」

「氣合ひとつですからね。」と、また誰かが言つた。

「それで何ださうですよ。稽古の時には碌に附けもしないで、いざとなるとヒタリと抑へてゆく豪膽な吹き手もあるさうで、これにはかなはぬと言つてゐました。」

「それが腹なのでせう。天性ですね。さうしてそれが心法にもかなつたものでせう。」

「型ばかりに囚はれてはあがきつかないといふことになるのですか。」

「先づ、さうでせうな。」

Iさんは吹いてゐる。

白い支那服の白髯の和製タゴール老人が大きな眼鏡の片紐を垂らし垂らし、ゆうらりと歩いて來た。

「やあ、來た來た、ロッペン團長。」と二三人が手を拍いた。

「あつはつはつ、つまらねえでさあ。」とタゴールさんは、無造作に欄干近くの反形のベンチに腰を下ろした。それから身體を斜めに、兩脚を上げると組み合はした。

「つまらねえものでせう。昨晚はどうです。大泊で、あつはつ。」とF君、なかなか逃がさない。

「御同様でさあ。ばらしますぜ。」

「御同様でもないな。」Fさんがまた眼鏡越し。

「そりやあ、えらいの何のつて。とてもだからな。はひるなりヤツと言ふと矢庭に飛びかかつて握手した、あの凄さとききたら、あつはつ、兎に角脅やかされましたよ。」

「何處でだい、いつたい。」とこちら。

「はつはつ、つまらねえでさあ。」

「や、ちよつとおもしろい處です。なにしろ、お相手が十六七の、はつはつ。」

「あつはつはつ。」「あつはつ。」「はつはつはつ。」となる。
 「と言へば、なんでも豊原では馬車でお乗り込みだといふことで、専らの評判ですぜ。」と、誰やらが左の隅から延び上つた。

「いや、あれはみんなで行つたのさ。物は見て置けといふのでね。」とロッペン團の一人。

「さうさう、何でもないのですよ。ただ素通りで一週だけぐるりと廻つて見ただけのことです。新聞記者や土地の人も附いてゐましてね。盆踊があるといふので行つたが駄目でした。」と私。

「だが、このお爺さんには驚いたよ。あつはつ、矢口の渡しの頓兵衛みたいで、づかづかとはひつて行くのでね。いや、閉口だ。」と庄亮。

「A君もA君だよ。石橋の袂で、それは龜の子のやうに躊躇み込んで動かないのだからね。」とF君。

「いいお坊つちやんさな。警部さんならちと下情には通じて置くものですぜ、風教視察といふ奴でね。」とタゴールさん。

「いや、つとめたいとは思ひますがね。どうも。」と若いA君は、そこで赤くなつて頭を搔いた。チラと眼鏡の下から大きな眼がはにかむところで、

「そりやあかん。」と扇子をパチリは右の三番目だ。

ああ、笛だ、笛だ。

「ところで、この夜明けまで、踊りに踊りぬいた人がありますからね。おもしれえおもしれえ。」と庄亮。

「へへえ。」とみんなが此方を見た。

「これは聞きものだ。何處です、いつたい。」

「豊原のあの、あそこの大通でだよ。あつはつ。面白うございましたでせうよ。」

「やあ、ありや面白かつたよ。盆踊が盛つてゐるといふのでね。歌會の後で、齒科醫のS君と一寸廻つてみたのさ。すばらしかつたからね。つい飛び込んで踊つて了つた。S君がヘルメットにステッキで、硬直しきりの、後ろからどつかの國の侍従武官兼警視總監といふところだ。踊つたなんて絶対秘密になさいと、歸りに耳うちした。」

「はつはつはつ、絶対秘密が自分でばらしちや何にもならん。」

「さうかな、困つたな。」

れうれうれうれうと笛が鳴る。

昨晚のA西洋料理店の饗宴はまつたく愉快だつたかと、私は心から微笑した。

樺太で同好の士を幾人も見出したといふこと、私の育てた児童自由詩の搖籃學校である山梨は鳳來小學の校長であつた高橋君が、大泊に轉任してゐて、偶然にも會ひに来てくれたこと、それに「日光」

の同人である大熊信行君のお姉さんに初めて會つて、自分の童謡を歌つてもらつたこと、青年たちも淑女たちも、私の顔さへ見れば誰もが莞爾してゐたこと、それから、私が立つて挨拶したこと。「ええ、今晚は皆さんに會へて大いにうれしい。」ときて、「この先を何か言はうと思つたが、何か途斷れさうだから、これで止めます。一杯のんで思ひ出したらまた遣ふことにします。」と坐ると、庄亮が「なるほど、これはうめえ。」と頭を叩いたこと。それから、やや酒が廻つてから、盛んに噪いで、昔のパンの會の話やら、その頃の私たちの唄をせがまれるままに歌つて、大恐悦で教授したところ。それからみんなの顔のスケッチはする、胴上げはされる。おしまひには、みんなを立たして、そのみんなの空椅子の上を片つ端から飛んで歩いたこと。何でもやんちゃの限りを盡して了つたらしいこと。

だが、もう、昨日のことになつて了つたのだ。私は今、オホーック海を北へ北へ、二百六十哩の彼方、ツンドラ地帯は敷香の寒村へ向つて直航中の高麗丸の船上にある。あの豊原の若い歌人たちとも、また一生に二度と逢へるか逢へないかすらもわからないのだ。

信行君のお姉さんは歌つた。この白秋の童謡を。あの夫人は音楽家だ。

吹雪の晩です。夜ふけです。
どこかで野鴨が啼いています。

燈もちらちら見えています。

わたしは見えています。待つてます。
何だかそはそは待たれます。
内では時計も鳴つてます。

鈴です。鳴ります。きこえます。
あれあれ、樞です、もう來ます。
いえいえ、風です、吹雪です。

それでも見えています、待つてます。
何かが来るよな氣がします。
遠くで夜鴨が啼いています。

私たちの、樺太の冬はちやうどこの通りですと、外の諸君も付け足した。
何の期待ぞ。

ただ、波、波、波、

笛の音ばかり澄んで来る。

「だが、二三日でも船を離れて、かうして還つて来ると、まったく、自分の巢にでも迎りついたらといふ気がしますね。」

「さうさう、ほつとしましたいたい。」

「それにどうも陸に上つてゐるうちは、何だか氣ぜはしくていけなかつた。」

「まったく、目まぐるしくてね、何を見ただか探したか、わかりやしない。」

「はつはつ、かうしていつも揺られてゐるとね、揺られてゐるのがほんたうで、何でもないので却つて不安心なやうな氣がしたものだ。」

「震災後、餘震のない日に限つて妙に寂しく思へたやうにね。」

「さうだ、さうだ。」

「どすが、こないにしてまた何處へ連れて行かへるか怪態けつたいやないふ感じはしまへんかな。だんだん日は遠くなるし、曇つては来るし。」

「さむざむともして来るし。」

「何處を見たつて波と空だしな。」

「猥談でもやりますか。」

「あつはつ、そこはNさんのお手のものがせう。」

「ふふ、つまらねえでさあ。」

「なにしろかうなると、この船一つがたよりでな。」

いや、笛の音一つがしみじみと頼りになつたみんなであつた。

「神様といふ氣はしませんかね。」

「驚いたな。いやに突拍子もない聲を出すぢやないか。」

と、みんなが笑つた。何といふかすれた笑ひだらう。

「神は死せりさ。ふん。」

「若え、若え、さう言つたもんでねえ。」と、またどの爺さんだか胴間聲をかつ飛ばした。

所謂微笑が私の頬にのぼつた。

「どうしたんだい。」と庄亮。

「いや、ちよつと思ひ出したんだ。羅風がね、非常に怒つてゐたんだ。どうしたと訊いたら、『K雑誌』は怪しからん、もう詩は書いてやらんと言ふんだ。何か失禮なことでもし向けたのかと思つたら、かうなんだ。羅風の詩に神様といふ言葉があまり多過ぎるから少し減らしてくれと言つて来たさうだ。」

減らせと言ふのも非禮だがね。三木君もよく神々と言ふんだ。でね、僕はかう言つたものだ。いや、君、こんな話がある。いつか僕に氣品のある、誰にでも歌へる宴會の歌を作つてくれと頼んで來たのでね、わざと古風にして、日本民族としての『酒ほがひ』の歌を作つて渡したものだ。すると酒の字があるから困ると言ふんだ。クリスチャンや禁酒會員が見たら文句が出るにちがひないから、酒といふ字だけは止していただきたいだ。君、酒もつかない宴會があつてたまるものか。亞米利加ではあるまいし、怒心頭に發したものだ。さうお仰ればさうですが、何でも困ります、あれは酒の讚美ですと言ふんだ。わからないのも程があると思つたね。それはね、『のめや、ともがら』とか『汲めや、うま酒』とかいふ繰り返しがあるからね。かう繰り返されては影響が大變だと言ふんだ。ぢやあ止せ、取りあげるとなつたら、それではあれは掲載します。が、然し、その御相談は、その詩の後にです、飲酒の害といふ一大名文章を誰かに書いて貰つて付けることにしますからそれだけは許していただきたいときたのだ。莫迦なことを言ひたまふな。と、それつきり怒りつばなしになつたがね。で、僕は思ふねえ。君には神様といふ字を減らしてくれと言ふ、僕には酒の字を止してくれと言ふ。こりや君、K雑誌は公平だよ、怒りたまふな。とね、さう言つて僕はなだめた。」

「あつはつはつ、こりやおもしろえ。」と、庄亮、大喜びで泳ぎ出した。

「羅風さんは、さう神様々々とお仰いますか。」と、また一人が乗り出した。

「ええ、それはね、羅風君はカトリックの實に熱烈な信者だし、トラピストへも三四年は籠つてゐま

したし、しぜん神といふ言葉が詩に現はれると思ひます。神を思ふことは羅風君としての唯一不斷の道ですからね。」

「ぢやあ、酒を思ふことは君の道かい。」と傍から。

「さうしてまた、庄亮の道かい。」

「あつはつは。」と、哄笑して、さうして軽く「まゐつたまゐつた。」と頭を動かした。

「だがね、羅風もよく言ふよ。僕が天神山の眺望絶佳な高臺に居を占めたのも、詩が出来るのも童謡を作ること、女の子が生れた時に紫の鳩が來たことも、みんな神の恩寵が君の上にあるのだ、恵まれてゐる。今度の旅行も神の導きだとね。これには僕もどぎまぎする。三木君がさう思つてくれることは有難いのだが、僕はカトリックの信者ぢやないのだからね。とにかく異端者としての僕にとつては一寸戸惑ひされるんだ。これとよく似た話があるのだ。もう十年も前のことだ。麻布の玄米煎餅の路地裏で両親と同居してゐた時のことだよ。さうだ、ちやうど『白金の獨樂』や『雲母集』の詩や歌の出來た頃だ。ある晩坐つてゐると、筆がおもしろいくらゐ動くのだ。何かかう自分以外のものが後から突き動かしでもするやうな物凄い無我夢中の感興が私を狂氣のやうにした一晩があつた。作つた作つた、百篇ばかり作つて了つた。で、實に不思議だから、夜が明けるとすぐ父のところに行つて話した。すると赤い顔をして笑つて『そりや、さうぢやろばい。』と言はれた。母もさうだ。母も微笑してゐられた。何故ですと伺つたら『そりやさうくさい、おどんが、ぬいいよか詩の出來るごつ、いつ

でん金光様にお願ひしとるけんくさい。』と言はれた。『お蔭があつたばい。』とき。それは金光様がお作り下すつた詩だといふのだ。両親は金光教の信者だからね。實際僕は呆然として了つたのだ。何だ、自分の力で自分がやつたのでないか。信じもしない金光様の何のお蔭だと思つたがね。ただ親の情といふものに撲たれて了つたのだ。まつたくこの両親の恩愛のお蔭だとね。僕は落涙した。この意味で、天主は信じないが、三木君の友情には感謝してゐる。今度も方々に手紙を出して置いてくれた。」

笛が鳴る。笛が鳴る。

「で、コワルスさんとかに會ひに行つたのだね。」

「うむ、齒科醫のS君が羅風の手紙を持つて見えたらう。謹嚴な硬直した態度で、あの人が下座に畏こまつた時には弱つたよ。羅風の紹介文があまり物々しいから僕もたじろいたね。S君はS君では是非コワルスさんに會つてくれ、三木さんに濟まぬと言ふ。で、ほれ、日の出温泉から出た足で、僕はS君の家に廻つて、同道して天主教會に訪ねてみた。」

「どんな人だつたい、その宣教師さんは。」

「いい人だつた、黒い長服を着て、すつかり宣教師タイプに出来てゐた。眼が柔和でね、顔が林檎いろで、頭はつるつると禿げ上つて、鬚や頬髯のやや禿ちやけた、どうしても五十四五と僕は見たね。後で聞いたが實際に驚いた。まだ三十を少々越したばかりだといふんだ。どうも西洋人の年齢はわか

らん。どうも考へるとをかしくなるね。案外も案外、僕よりも十歳ちかく若かつたんだからね。波蘭士人ださうだ。」

「何か話があつたのかね、君。」

「いや、前から知らしてあつたので、すぐに出迎へてくれた。スリッパを出してくれたので、靴を脱いで上つた。握手するのかと思つて手を出しかけたが、向うは純日本風で挨拶したので、こちらも差し控へた。室は簡素なものだつたよ。テーブルに日本の古い本箱が二つばかり隅つこに置いてあつた。壁には大きな樺太全圖の軸を一つ掛けてあつたきりだ。私も氣輕にテーブルを隔てて對ひ合つて腰掛けた。私はS君の紹介の後で、實は三木君と詩の雑誌を出す事になつたので、この際、この旅行をいい機會として、トラピストに於ける彼の當時の住居や信仰の生活や、周圍の風物などをよく見て置きたい希望だといふことなどを話した。それから日本の子供の詩の話などを訊かれるままに話した。僕もすつかり快活な氣持を持ちつづけてゐられたよ。三木君のことも訊いた。白秋さんの感じはどうです、いいでせうなどと、S君が傍から言葉を添へるので、コワルスさんも、あかくなつて微笑してゐた。コワルスさんは何でも豊原草分けの宣教師で、獨身で、土地の信教の爲には殆ど一人で盡してゐるのだと、S君はまたあの人を僕に非常に褒めてきかした。僕もいい感じがした。それから僕はさよならをのべて立ち上つた。三木さんによろしくとあの方は送つて來た。それからね、僕に、また春になつたら避暑においで下さいと微笑した。僕も微笑したよ。ね、さうぢやないか。教會を出てからも、

いい匂ひのする人だと思つた。日本人同志にああしたいいい匂ひの残る面會といふのはなかなかないやうだね。」

「樺太長官はどうです。」とF君が聲をかけた。

「ああ、あの訪問ですか。」

「はつは、あれには驚きましたね。不得要領きはまるんだ、實際。」

「風采はあがらないが、あれでなかなか如才ない方でせう。でも官僚は僕の性に合ひませんね。」

大きな大きなガランとした階上の一室にその瘦形の長官某氏が納まつてゐた。大きなテーブルには書類が少々散らばつてゐた。牧畜家のH、麥酒會社のF、印旛沼開墾の庄亮。京都府警部のA、それに私がその前の椅子に腰を下ろしてゐた。昨日の正午前のことであつた。

植民について——土地選定、土地區劃、土地處分。農業移民の生活状態について。畜産について、また林業について——造林、保護、調査。水産、或は教育について。交々詰めかけ詰めかけ質問した私たちに、かの樺太の王様たる長官が何を、また如何なる熱誠を以て應答したらう。

「ええ、實はそのう。」「ええ、實はそのう。」で、やや罇の入つた重い濁聲で、咄辯でもなく雄辯でもなく、ただ冗漫言をだらだらと素麵式に扱いてゆくだけであるので驚いた。質問の要點には少しも觸れないで、聞いてゐると枝葉の話ばかりで續くのである。それでゐて、此方には口一つきかせないで、一人で埒も無く喋るのである。そこで、その間に屬官が三度ばかりきまつてコッコツとノックするの

だ。

廊下へ出ると、F君が、ああ〜とやつた。

「不得要領な男だなあ。」

少くとも私たちは何一つ與へられないで、公會堂の歡迎會席場へなだれ込むより外はなかつたのだ。「瓢箪鯨とは政治屋のことですよ。」と、今でもF君は吐き棄てるやうに罵つた。

「だがそのう、あれでなけりや身が持てないんだよ。要領を得ちやすぐに没落だからね。だから僕はそのう、お百姓にならうてえんだ。のんきだぜ。」

笛の音いろは一色に、れうれうふれうと鳴つてゐる。

「ゴルフはどうですか、皆さん。おやりになりませんか。」

惠比須面のM重役が、その長い柄の杓子棒をコトンコトンと音さして、立てて、流して、ふらついて來たが、誰もまた立ち上らうとはしなかつた。

Mさんはすつかり悄氣て了つた。今さら笑顔も引つ込められず、二等の船室ケビンを廻つて消えた。

「一萬圓。」と、ほろ酔のいい機嫌の紅ら顔の、胡麻鹽頭の、それが眼鏡の底の目くばせで、私へ向いて、またつつつと通り過ぎたは濱の輸出商Cといふ小柄の老人。

そこで、私は庄亮を見た。どうにも笑ひがこみあげる。

それは小樽を出ての海上の夜の食堂のことであつた。いい氣持に陶醉したC老人は、突如として私

に年一萬圓の補助を申し出た。

「北原さん、洋行なすつちやどうです。及ばずながらわたしが三萬圓御用立てしませう。年に一萬圓づつ、三年ですぞ。」

私は困つて笑つてゐた。

「占めた。」と庄亮。

「こりやうまい、白秋君、證文をひとつ書いてもらつとこぢやないか。」

「ようし。」とC老人、早速に半紙に書きなぐつた。

「A博士、ひとつ御證明を、そのう願ひます。」

A博士は謹嚴であつた。容易に筆を執らうとはしなかつた。そこで、

「Mさんどうです。」

「あてか、さよか、よろしい。」と自稱美術家のパトロン、M老人、つるりと唾に筆の尖、薄墨で蚯蚓流。

「占め占め。」と庄亮、墓口にねぢ込んで、懷中に固くしまふと、「さあ、飲むぞ、飲むぞ。」

「飲まう。大いに飲まう。」とC老人、ふらふらと立ち上つたが、また私を見ると、

「三萬圓、一年に一萬圓。」

小鼻に一本、直指の型だ。

だが、その翌朝になると、何か會つても鼻じろんだ。それがまた、酒氣に乗つて來ると、そら、また、「一萬圓。」である。

ところで、此方だが、うっかり忘れてゐたのを、ふつと氣がついて墓口をあけて見たその後のことだ。

「あつはつはつ、こりやおもしろえ。あつはつ。」

「何だい、どうしたんだい。」

「おもしろえおもしろえ。」

と、證文の一札である。

金壹萬圓也 北原白秋

とある。

「これはそのう、白秋にイ一萬圓贈る、あつはつはつ、ぢやあないんだね。君の値段があ一萬ン。」

「おやおや。」

「やあ、ははあ、まだおもしろえぞ。ききたまへ。わて、しりまへん。あつはつ、これがそのう、M

爺イさんのう。」

「證明かね。」

「あつはつはつはつ。」

そこで、二人が腹をかかへて轉げまはつたものだったが、知るや知らずや、またまた一萬圓である。

「あの人も寂しいんだね。」と私も見送つた。

と、

でれでれと二等の二組。男は中背の目尻下り、女は髪を等分の、これはこつてりの、おちよほ口。その戀々相愛の、手に肩、肩に頬を寄せて、私たちの見る眼も憚らぬ御遊歩である。

「なんだい、ありや。」

「叱ッ。」

「あれが君、評判の鴛鴦夫婦でさあ。」

「袋叩きにしようといふ、あれですかい。」

「あつは、何でも白粉刷毛まで御亭が叩いてやるんださうだよ。」

「へへえ。」

「そして湯殿の御立番でさ。」

「いよいよいよいよ。」

笛の音いろが消えかかった。

「やあ、はあ、これは先生、かけちがつてお目通りもし申さんで。ええ、いかがで、一杯。」
車輛會社のS爺さんだ。ずるぶんきこしめしてゐる。

「やあ、先生、飲んまつしゆう。ひさしぶりですたい。この二三日、何處どこどん居んなはつたぢやい、いつちよんわからんぢやつたたい。吉植さん、飲んまつしゆう。ほんに、つまんなうしてなんたい。おいでまつせ。三等ん方がよか。飲んまつしゆう。飲んまつしゆう。」

九州男のYだ。これは豪傑、胸をはだけで、づしりづしりとやつて來た。これも少々酔つてゐた。
「後で行くよ、君、今晚。」

「來なはれ。かまはん。あん爺さんも寂しかと、言よらつしやる。吉植さん。」

「酒はごめんだよ。まだ咽喉がわるくてね。」

「なつちよらん。そんならよか。」

「あ、また、行つて了つた。」

「みんな、變なんだね。」

「なまじ陸で浮かれたせゐで、妙に落ちつけないんだらう。何だかみんなの影が薄いちやないか。」

「それに北へ北へと渡るんではね。」

ぼつり、

ぼつり、

やつぱりオホーツク海だ。
笛は袋にしまつたらしい。

ぽつり、
ぽつり、
ぽつり、
ぽつり、
ぽつり、
ぽつり、
ぽつり、
人は一列、元の藤椅子、右も左も同じ高さの頭である。
霧がさあつとかかつて来た。
なんと黄色い日の燻しだ。
と、
はつたりと笛の音いろが止んだのである。
急にはずむエンヂン、
スクリュウ、
舷側の波の裂けて碎ける音までが、白い嵐を吹きあげる。
オホーツク海だ。

敷香

や、黒い牛がある。

私が揺り上げ揺り傾く解はじの中から初めて見た敷香シカの第一印象は、一頭のその黒い牝牛であった。すぐとつときの砂濱の一角にぼつつりと彼女は突つ立つてゐた。その下半身を埋めた雑草の緑は見るも鮮かであった。國境の安別で見た女郎花風の鬱金色の花も簇がつてゐた。だが、凄じい飛沫のなだれであつた。幌内川の濁流とオホーツク海の波濤とがその河口で激しくかち合つて騒ぐのである。それにまだ昨夜の烈風の名残が容易に収まらうとはみえなかつた。

上陸してみると、敷香はかなりの寒村であつた。さうして到る處が灰色の砂地であつた。その海岸道路には蝦夷松の葉で飾られた歓迎門が濃青い簡素なアーチを作つて、私達觀光團一行をウエルカムした。くぐつて少し行くと露西亞風の丸太小舎の郵便局も目についた。それに運送兼業の雜貨店や、やや小綺麗な店屋が飛び飛びに二三軒はあつた。どの店にも繪葉書は賣つてゐたが、後れて私がはいつた頃にはもうとつくに氣早の人たちから選み散らされてゐた。それで漸く、丸太小屋の廂に奉迎と

書いた提燈を吊して、脛の長い女の子と立つて笑つてゐる肥つた露西亞人の女の寫つたのを一枚手に入れて、早速うちの子に通信を認めると、急いで郵便局の小窓の前に行つてみたが、此處で放り込むよりも北海道の稚内ワッカナイへ歸航してからのの方が餘程速いといふことだつた。それでも兎に角出すことにした。いい記念の爲に。

河口を少しくのぼつた空地には木羽葺こしほぶきの休憩所が一つ見えてゐた。まだ接待の準備もつかないらしく、若い酌婦風の女が一人二人、風に吹かれて、對岸の遠いポプラや白樺のかがやきを見入つてゐた。眞夏とはいつても何かしら寂しい秋口の朝の光であつた。まだ一行の誰もが來て休んではゐなかつた。

「姐さん、お茶はまだですか。」

私は他のやうに白樺の皮を剥ぎに行つたり、ざんざめいて歩き廻つたりするのが億劫であつた。「おほほ、もうぢきですよ。」

と、女のひよりは襪をかけた。

河の水は一面にちらちらしてゐた。利根川のやうに洋々たる大河であつた。オロチョンギリヤーク土人の獨木舟オウクムアの競漕がおつつけ花火が揚ると初まる手筈であつた。それから一行の誰彼がどやどやはひつて來た。オロチョン人の手製に成つた馴鹿トナカイの鞆の鞆や、財布——それは太い色糸で不細工に稚拙に裝飾してあつた——白樺の皮鍋、アイヌの厚司模様のついた菅の手提げ、それに玩具の櫂や獨木

舟などを彼等はてんでに買い込んで来た。それを見ると急に私も欲しくなつたのでまた引返して、賣れ残りの鞆の一つをどうにか探し出した。馴鹿トナカイの臭みがして小汚くて、赤と黄との圖案があまりにけばけばして、子供でない自分が肩から引つ掛けるのは些か気がさしたが、そこはそれ旅の氣安さであつた。その鞆は紐が短いので、掛けると左の小脇に吊り上つた。幼稚園の生徒のやうだつた。みんなが笑つた。

内地の小さな村役場くらの物産陳列館にもはひつてみたが、豊原のを見た眼には別に取り立てて變つた種類も無かつたので、おそろしく深々とした熊の毛皮の外套や、防寒帽子、雪沓などを取り騒いで買ひ込んでゐる人たちを後にひとりでもた外に出て了つた。

部落はたいした町家並にもなつてゐなかつた。どの家も平家で、半ばはお粗末なブラック風であつた。露領時代の名残も見えた。草もばうばう繁つてゐた。いちばん廣い通かと思はれる砂地の十字路に出たところで、私は上の方からビールの空罌らしいのを両手にかかへて小走りに駆けて来る八つか九つぐらゐの卵色の軽い服を着けた亞麻色の髪の子に遭遇であつた。と、その女の子が私のオロチヲンの鞆を見るとたちまち立ち停つて笑ひ出した、身體ちゆうで。露草色のくるくるとした瞳であつた。何か見たやうな顔だと思つた。

「いいだらう、これ。」ぼんぼんと、こちらも叩いてみせた。それからふつと氣がついて私は訊ねてみた。

「あ、君だつたね、繪葉書に寫つてゐるのは。」

「やだア。知らないよ。」

「それは何なの。」

「石油。」

「君の名は。」

「セーニヤ。」

さう言つて、その罌を眼よりも高く差し上げると、また飛び跳ねる馴鹿トナカイの仔のやうに活潑に走り出した。素足の裏が白く白く翻つた。

河畔へ出て見ると、休憩所の周りは既に群集で埋つてゐた。何と珍らしい樺太の晴天であつたらう。光り輝く數百の蓑帽の反射は、近い水面を、空気を、砂地をことに眩あややく新あらたにした。さうして岸には長い權オクサを蜈蚣見たいにそろへた細長の獨木舟オクサが幾隻か波に揺られて、早くも飛び込むと持場々々を固めるオロチヲンギリヤークの青年たちも勇ましかつた。彼等は鼠色の輕装にばんばらの蓬髪を長く靡かしてゐた。

川の上手から、靜謐な、光り輝く漣の上を影繪のやうに急速力で漕いで来る丸木舟も見えた。一人、二人、三人、四人、五人、あ、六、七人。

「来た、来た、金太郎々々々。」歡聲がひとしきり揚つた。

オロチョン族の金太郎は少からず人氣男と見えた。競漕でもたうとう彼の一組が見事に優勝した。あの土人どもの無智な一圖の活動は寧ろ峻烈極まつたものだつた。映畫で見る樺太犬の樞引とたいして違ひはなかつた。四隻の細長い獨木舟オウクダに分乗して、飛沫を散らして先後を争つた凄じさは、私としては見てゐて壯快を感じるよりも、却つて憐愍の情に撲たれたのであつた。それともう一つは格別勝負事には興味を持ち得ぬ私にとつては、暑くとも日の照る砂地に踞坐あぐらでもかいてゐる方がよかつた。私は手をあげてセーニヤを呼んだ。セーニヤも見に来てゐた。

「来たね。」

「うむ。」

「君の家何處なの。」

「シヨウヒン……ふふつ、あの横。」

「パパは。」パパでもわかるかと思つて訊いてみた。私は露語を知らなかつた。

「死んだよ。ゐないよ。」

「ママは。」

「ゐるよ。ミルク、初めたよ。牛ね、一匹ゐるよ。」

ああ、あの砂濱に出てゐたのがさうだつたかと思つたかと私は微笑した。

「君たちは何處から來たの。」

「アレキサンドロフスキー。」

「何時。」

「去年、去年の前、あ、忘れた。」

「パパは何してゐた。彼方あつちで死んだ。」

「うむ、お百姓。牛ね、羊ね、ゐたよ。澤山。パパ殺された。」

「ほう、どうして。」

「パルチザン、悪い人。みんな逃げた。お金もつて。」

其處へ、また、赤や黄や濃い藍染めの更紗布を頭からひつかぶつたオロチョンの子供たちがぞろぞろと集つて來た。服は廉物の白に花模様のキャラコの更紗で、何れも韃靼風のものかと思はれた。顔も手足も垢じみて、まるで乞食の子のやうだ。

私はポケットからドロップの紙袋を取り出すと、少しづつみんなの掌に配つた。

「君、何といふの。」

「マッチョ。」と十歳ばかりの女の子が答へた。

「君は。」とまた私は次の女の子に訊ねた。

マッチョが「ウンノック」と代つて答へた。

「この小さい子は。」

「ムンムック。」

そこへもつと小さい赤子を抱いて来た鳶色の老婆があつた。いかにもツングース系の、顔が平たい琵琶型の、そして眼の細い、鼻のひしやげた、薄汚ない、まさかシャーマン教の巫女でもあるまいがとをかしくなつた。御亭主はエフロックで、自分がクルグックで、赤ん坊がドイチだと云つた。兎に角これでも揃つて盛装して来たのであつた。攝政宮殿下の御行啓を奉迎に、上流のツンドラ地帯から出て来て、そのまま部落に歸らずにゐるといふ、水産課の人の話であつた。

「オロチョンギリヤークの不潔さといつたら、顔ひとつ洗はず、何も彼も著物で拭くんですからね。それに米も麥も食べません。魚の干物ばかりで生きてゐます。奴らは夏になると河のそばへ出て来て、冬は山地に籠るのです。」と、傍から私に話した。みんなが無表情な愚かな目付をしてゐた。さうしてまるで凍えかかつた魚のやうに赤や黄や青のドロップをしきりに嘗めた。

「君の家へ行かうか。」と私はセーニヤを振り返つた。

「うむ、ミルクがあるよ。」とセーニヤは駈け出した。

セトニヤの家は廣い砂地の通に面した丸太組の小舎であつた。窓の下には背の低くて小さい向日葵と、赤がちの黄の金盞花が咲いてゐた。セーニヤははひり口から飛び込むと、もう窓に顔を見せて、

ぴつと下唇を尖らした。それから飛びつくやうに上半身を撓めて乗り出すと、片手を窓枠にしつかと、片手を思ひきり下向に伸ばし伸ばし、うるさく垂れさがる亜麻色の髪毛をまた、幾度か振り立てて笑つた。桃いろの首根つこだ。

「取つておくれよ。」

「そつちから取れない。」

「やだなア。うん、よし、——ほら。」と葉と蔓と花とをいつしよくたに引きもぎつた。

はひり口の横には貼紙に「ミルクあります。」と拙い日本字で書いてあつた。

内へはひつて見ると、二間きりしかなかつた。佗びしい家具の配置であつた。取つつき室には粗末な木地のテーブルに、ミルクの空罐だのつまつたのだの、ごちや交ぜに竝べた、その横に素の片脰をついて、同じ亜麻色の髪のセーニヤによく似た若い娘が此方を微笑して見てゐた。少し顔を紅くして、私を見るとまたセーニヤの方を見た。彼女はさして美人ではなかつた。ただいかにも快活で熱情的で、やや投げやりにも見えた。

と、ママが奥から出て来て、眼で會釋をすると、すぐに善良な豊かな笑顔になつた。さうして窓際の小さなテーブルに、その大きな圖體をぶつつけるやうにして腰掛けると、無造作に壁に背を凭した、黒に近い葡萄酒色の輕装で兩手を高くまくり上げ、薄紅い厚ぼつたい耳朶には金の耳環を繊細に、チラチラと顫へさしてゐた。二重頤の、頬の肥えた、さうして七面鳥のやうに胸の高く張つた堂々とした

内儀さんであつた。賢しい知識からこれと深められた眼色は見えぬが、ただの農民の妻だつたに過ぎぬが、いかにもお人よしの隔てのない愛敬がその顔にも表はれてゐた。

私は先づミルクを所望した。

セーニヤが今度は後ろから、姉さんの首つたまにかじりつくくと、矢庭にその左の頬を持つて行つた。姉さんは、身體を反り曲げて、おつほほと笑ふと、何か歌の一曲さりでも歌ふやうに咽喉を轉がした。

「セーニヤ、姉さんは何といふ名。」私はそれで程よく寛ぐことができた。

「イフェミヤ。」

イフェミヤはその亂れた前額の毛をわざと巫山戯てその手で掻き散らした。

「はる、る、る、る。」

それから、

「イフェミヤ・ベリヴェヤワ。」

私は黄色い小型のノートを取り出した。

「どう書くの。書いてお見せ。」

イフェミヤは直ぐに立つて来て、私から鉛筆を受け取ると、一字々々力を籠めて書き記した。了るとまたスツと坐つて、兩腕を前にばたりと投げ出した。さうして兩手の指を深い前髪の中に、突き入

れて笑つた。それから、右の人差指を一寸鼻の上に當てた。

「ベペエデエバ。」と私が讀むと、

「ベリヴェヤワ。」

「ベリヴェヤワ。」

ほつほつとママまで腹をかかへた。さうして、「ううむ、駄目。」と含み聲でつつと身をねぢらした。

B=B

B=V

と、ノートに書いて、「ね。」

眼を近々と寄せた彼女たちの字を書く時こそ一生懸命であつた。

「神戸……いい。」

「え、いい。どうして。」

「十月行く。此處、駄目。」

「なぜ駄目なの。いいぢやないか。此處。」

「駄目。赤來ます。」

「穩ね、乗つて來るよ、わるい人。」

「だつて、ここは日本だらう。」

フスキーから持越しのものであらうか。眼がしよぼしよぼして内氣らしい、彼も素直で善良さうであつた。セーニヤに訊いたら従兄だと答へたが、イフェミヤがちよつと紅くなつてセーニヤを睨んだので察すると許嫁の間らしい。そこでその青年をも加へて、パチパチといくつかやつて怪しい素人寫眞の何枚かが濟んだ。

晝飯が過ぎたら、一行が舟でツンドラのフレップ摘みに行くが、行かないかと誘つたら、セーニヤを初めその従兄の青年までが大喜びで約束した。全くこの僻遠の地で、三百人といふ文明人——彼女等から見れば——の集團を曾て見た事も無かつたらうし、その常に憧憬してゐる日本内地の都會生活者と伍して半日の遊樂をほしのままにするといふことは彼女等にとつて望外の幸福を感じずにはゐられなかつたらう。セーニヤは今度は表から金盞花の二つ三つを摘んで私にくれた。

「ぢやあ、待つてゐるよ。」

「行くよ、すぐ。」

*

ツンドラ地帯の清遊に就いてはまた筆を改めて精細を盡したい。ここではベェリヴェヤワ一家の事を主題とするからである。ただ二隻のランチに一隻つづ曳かれた私たちの大團平船が、沿岸に蘆荻が繁り、遙かの川上に中部樺太の山脈が仰がれる、その幌内の大河を白樺、ポプラ、椴松、蝦夷松の林

を左右に眺めて、一時間餘りも溯航した壯快さを傳へて置きたい。全く内地にもすくない水郷だといふ感じが私を喜ばせた。海驢のやうに黒くて大きな流木も浮んで見えた。ベェリヴェヤワのお母さん七面鳥は私の乗り込んだ團平船の高い艦の方に大きく膨れて蹲んでゐたが、いかにも樂天家の本相を表はしてゐた。さうして事毎に「神戸々々。」で話は持ちきつてゐた。何でも明日にでも牝牛を賣るやうな口吻には誰でもが驚いて笑ひ出した。だが兎に角すつかり中心人物になり了せた。

ツンドラ地帯とは蘚苔類の層積から成る幌内川の沿岸は廣茅數十里に亙る地帯の謂である。その地帯には俗に樺太葡萄と稱する紅い果のフレップと紫の果のトリップとが一圓に野生してゐて、自由人の來て摘むに任してある。極樂園である。フレップもトリップも躑躅によく似た葉の細い小さい灌木である。舟が著いて上ると私たちは皆二時間ほどをその灌木林で悠遊した。いい日和であつた。私たちはフレップを摘み、トリップを探してまた心ゆくままに味ひ、且つ夢みた。さうしてまた耀やかで涼しい風と光と色と音とをもまた十分に新鮮に食らひ過ぎるくらゐに食らつた。セーニヤは盛んに跳ねまはつてゐた。何と黄色いカナリヤであつたらう。イフェミヤはその許嫁の従兄と時をり出會つたり、離れたりして摘み耽つてゐた。彼女は圓みのあるいい聲の持主であつた。暑い暑いと言ひながら、両手で胸の乳房の上を抱き締め抱き締め、彼女はよく歌つた。静かな、しかも強い日光の下で、戀々綿々として彼女は歌つた。何といふ情熱的な牧歌であつたらう。

歸航の時、私達一行の舟は右岸の白樺林の前に散在するオロチョン人の部落の前に差しかけた。

土人たちは幾つかの煤色の天幕テントの前に簇つてゐたが、私たちの舟が通ると盛んに色々の光る布を頭の上でうち振つた。私たちも之に應へた。萬歳ア、萬歳ア、萬歳ア。見ると赭つちやけた魚の干物が幾並びも棚に掛けられてあつた。その魚の干物にも日射が移りつつあつた。

「金太郎……金太郎。」

と、セーニヤが伸び上つて手を拍いた。

「おおさうか、金太郎がゐるのか。」

「金太郎萬歳ア。」

と、またひとしきり舟の中ではさんざめいた。さうして休憩所の前に著いた頃には、もうそろそろ日の光も黄色く暮り初めてゐた。風も出て来た。かうして敷香の夏の一日も、雲がまた薄く低迷して、うそ寒く、寒く、暮れて了ふのである。私たちはまた一旦上つて、中食所であつた旅館の一二へとりどりに鞆や土産物をそろへに急いだ。

それから小半時の後、私たちはまたランチに曳かれて本船へ歸ることになつた。敷香の有志やおロチョンギリヤークの土人たちも一同うち交つて、その河口の石垣に立つて見送つた。クルグックの婆さんも女の子のマッコ、ウンノック、ムンムックたちも赤や黄や藍の更紗の冠で並んでゐた。

例の肥つたベリヴェヤワのママは左右を眺め眺め、さも名残惜しさに、それでも眼では笑つてゐたが、舟の出しなに、いきなり大きなスカートを舞はして飛び込んで来た。送つて行きたい、高麗

丸の船室ケビンを是非見せてほしいと言ふのであつた。イフェミヤも續いて飛び下りた。許嫁の青年も、これは軍隊式に身軽くすぼつと飛んだ。續いてまたセーニヤが人々を掻きわけると、両手を後ろに擴げて、いざと身構へした。恰度その時、「駄目々々、あぶないあぶない。」と言ふ聲が岸と舟とに起つた。

「セーニヤ、セーニヤ。」とママが呼んだ。

だがランチは旋廻し初めた。濠々として黒煙が靡き、とどろくエンジンの音が人々を息せはしく焦ら立たせた。セーニヤは幾度か飛び込まうとして、支へられた。石垣と舟との距離が一間になり二間になり三間になつた。セーニヤはしきりに母を呼び姉を呼んだ。だが、最早やどうにもならなかつた。「乗せてやれ、乗せてやれ。」と私たちが叫んだが、今はそれも危険で近寄れなかつた。と突然、火のやうなセーニヤの泣聲が起つた。セーニヤは兩腕を舂とその顔にあてた。

ママは何か大聲で呼び續けた。たぶん牝牛を家へ連れて歸るやうにとでもいひつけたことと思はれた。

高麗丸はこの沖合ではいかにも壯麗に、またいかにも文明の高貴な象徴であるかのごとく眺められた。さうして船室ケビンの灯が一齊に點いた明るい美しさといつたらなかつた。

星。

星。

星。

星。星。

ママやイフェミヤは眼を輝かして手を拍つた。彼女たちには高麗丸が大貿易港神戸の一部であり、神戸はまた高麗丸の延長であるかのごとく思へたに相違なかつた。

日が赤く圓く、それでも鈍く寒く、今はオホーツク海の遙かに沈みつつあつた。はてしもない北方の夕焼が次第に空には濃くなつて來た。

セーニヤは泣き泣き、牛のゐる傍まで駆けて來た。

「セーニヤ、左様なら。」

「セーニヤ、左様なら。」

セーニヤと黒い牝牛とが、ぼつりぼつりと、砂濱の叢に残されて了つた。いつまでもいつまでも黒く突つ立つてゐた。

海豹島 その一

さあ、いよいよ海豹島だ。

讀者諸君。

私はもうぢりぢりしてゐたのだ。旅程が長くて、いつまでも私の筆はこの目ざす一大驚異境に達しなかつたからだ。

來た、來た、今度こそは縦横無盡だ。

飛躍、飛躍。

海豹島こそ見物だらうと人は言つた。私にしろこの樺太旅行の眼目は全くこの海豹島だと期待してゐた。恐らく三百の觀光團員總てがさうであつたにちがひない。

この海豹島は眼前にあるのだ。

ブラボウ、ぼう／＼／＼ぼうおうと汽笛が吼える。

八月は二十日の黎明、オホーツク海の曉色。

黒だ——鳥だ。

一海渾。

萬歳。

青だ。ああ、透明だ。——赤だ、樺だ、雲だ。

あ、小さい太陽、朱だ、北だ。

波、波、紫紺の波、波、うねり波。

光、光、光、光、金の閃光、運動。

かつきりした水平線。

鳥だ、あ、ロッペン鳥だ。

飛ぶ、飛ぶ、飛ぶ、

飛ぶ、

飛ぶ、

黒、白、黒、白、黒、白、白、白、

白、白、白、白、白、

黒、

黒、黒。

ひりいりい、ひりいりい、へう。

へうと来た、

何と世界より大きく見える翼、

一羽が来た。

鳥鳥鳥鳥鳥

鳥鳥鳥鳥鳥

鳥鳥鳥鳥鳥

鳥鳥鳥

鳥鳥鳥

鳥鳥鳥鳥

鳥鳥鳥鳥

鳥鳥鳥鳥

鳥

驚く。驚く。

圓の、双眼鏡の端から端まで、
 黒上衣の、白胴衣デッコキの、佇立した、密集した、幾段々になつた、
 鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥なのだ。
 ロッペン鳥の懸崖、岩壁——斷層面。
 いや、島自體がロッペン鳥の斷層なのだ。
 正面きつた。
 と、展開、第一光景となるのだ。

第一光景

島は小さく低かつた、頂上は平坦で。
 恰度、四六版の本を横に見た形だ。
 まだほの暗い、藍鼠の背皮、その背皮は懸崖だ。
 赤い、豆の太陽の南、影になつた懸崖の残雪、
 と觀たが、違つた。

生きてゐる、生きてゐる。

動いてゐる、動いてゐる、動いてゐる。

生長し、生殖し、受胎し、産卵し、展望し、喧騒し、群立し、思考し、歡喜し、驚異し、飛揚し、
 踊躍し、——島そのものから、ああ、島そのものからすばらしい創世紀にあるのだ。

こちらは高麗丸の右舷、中甲板の欄干に總出で、かなしいかな、人間人間人間なんだ。

「いつたい、何羽ゐるんだ。」

「三十萬。」

「ほう、三十萬。」

「わかりやしないさ。計算できるかい。」

「坪で計るんできあ、坪で。」と水産課だ。

「ペンギン鳥とはちがひます…。」

「ちがひます。似てますがね。海鴉といふ奴です。」

「直立してゐるんだね。ありや、おもしろいな。」

「あれで卵を一つづつ兩股の間に挟んでゐるんですよ。みんな。」

「へえ、どんな卵です。」

「それは綺麗ですよ。青磁いろで、黒い斑入りで、圓錐形に近い楕圓で、大きいんです。」

風だ。

光だ。

飛ぶ、

飛ぶ、

飛ぶ、

飛ぶ。

飛ぶ。

「やあ、飛んでゐる、飛んでゐる。」

岩壁の縁が、縁から、はがれて、飛ぶ、飛ぶ。

白光、

赤光、

紫金光、

閃々光だ。

「あ、啼いてゐるやうだな。」

飛沫、飛沫。

「こりやひどい。とても上陸^{あが}できませんよ、この波では。」

「決死隊だな。一番やつつけるかな。」

飛ぶ、

飛ぶ、

飛ぶ。

飛ぶ。

飛ぶ。

飛ぶ。

第二光景

「坊や。」と私は心で叫んだ。

どうしたんだ、いつたい、私は。

竹林だ。紅い芙蓉の蕾だ。

藁壁の木兎の家の窓から顔が出る。——圓い眼だ。あ。

「君、君、白秋くうん。そのう、おとせ臙舘獸は何處にゐるんだね。」

「臙舘獸かい。」

さうだ、此處は海豹島なのだ。

オホーツク海は樺太の東海岸北知床岬の南方十海渚だといふのが、この海豹島の確かな位置とされ
てゐる。その海豹島は長さが二百五十間、幅が三十間の、ほんの小さな岩島に過ぎないのだ。それを
白い白い砂濱が四周に繞つてゐる。私たちはその西側に直面して、今は僅かに五六町の沖合まで近々
と寄せて機關の運轉を止めた高麗丸の船上にあるのだ。

晴天だ、すばらしい。

何とこの微塵光の新鮮さ。ああ、朝はすでに爽やかに笑つてゐるのだ。

岩壁に密集したロップン島の風景は、空の明るに従つていよいよ細かに黑白分明し、その飛行はま
た躍く風の幅となり、川となり、旗となり、帆となり、吹雪となり、波濤となり、無數に白く、ま
た、黒く紫に、また白く白く擾亂して底止するところを知らないのだ。

汽笛が吼える。巨大なあらゆる通風筒の耳。

噴き出す湯氣、大煙突。

海上の一大寶塔——高麗丸。

その汽笛のぼうぼうは島と空とに緩く深く響いて、遠心的に白く廣く擴がつてゆく。

空腹だ。ぼうぼう。

パパ、おまんまアアアア。

私は涙が流れかけた、双眼鏡の下からだ。

「や、日の丸だ、おい。」

島の最高部、柱が天を摩して一本。日章旗だ。日本だ、日本だ。

「臙舘獸は見えないかね。君。みんな騒いでるがね。」

「待ちたまへ。や、赤い家が見える。」

「見えてるよ、さつきから。監視人の小舎なんだらうが。臙舘獸がゐるねえ。」

「臙舘獸は向うつ側にゐるさうです。」と誰やらが前から振り返つた。

「なるほど、變だと思つた。」

「ある、ある。ほら、あれがさうらしい。」

黒い點々々、

右の砂濱の尖端、

あ、ざんざら波、

一面の反射光、

銀、銀、銀、銀、

天氣晴朗なれど浪高し。

ところで、白い帽子の白詰襟の老ボーイ、食堂の入口に現はれるなり、燦爛と、さて悲しげに笑つたが、左に銅鑼、右に撥、ぢやん、ぢやらん、らんくくくく。

「一杯やるか、ビールでも。」

「祝杯、よからう。」

——ビール、正宗、サンドウキッチ、サイダア、牛乳、餡パン、マッチ、新聞、——

あ、坊やの聲だ。隆太郎。隆太郎。

第三光景

赤塗の羽目板の家はたしかに監視人の小舎であつた。

ほんの掌ほどの畠、刺身のつまほどの菜つ葉。

鹽漬肉の貯蔵庫。

撲殺人の粗末な宿所、その外の砂地に散亂した白い獸骨、鬱金色の岩菊。

此處まで上陸するにはそれこそ一通りの騒ぎではなかつたのだ。

迎へのモーターボートが傳馬を引つ張つて來て辛うじてロップを投げる。ブリッジが激しく上下す。凄じいブリュウブラックの波の凹み、その凹みの底にひたと吸ひついた欄干の眼、眼、眼。

米領「ブリビロフ」露領「コンマンドルスキー」さうしてこの日本領の海豹島（露名、チュレニ島、ロッペン島）。世界に三つしかない臘腸獸の蕃殖場だ。絶海の孤島であるこの海豹島には人間の爲の傳馬などは二隻と用意されてある筈もなかつた。だから一組二十人として十五回に分乗することとなつた。一同が上陸したるまでに半日はかかる。と、それぞれの見物の時間は極めて短縮されてあらねばならなかつた。にもかかはらず、私たち二人は特別に最初から渡つて最終まで居残らして貰はうといふのだ。危険な瀬踏も承知の前である。眞つ先に私がブリッジを駆け降りると、續いて庄亮、その他

のロップン團員がおなじく斜めの飛沫で濡鼠になりながら、パッ、パッ、パッと、傳馬へ躍り込む。

「萬歳。」と上から歡呼した。

たちまち波濤が溪谷になり、丘陵になつた。

「やつ、海豹ぢやないか。」

頭のぬめつこくて圓い、黄色い頬つぺたの、眼の柔らかな、鬚の目だつ、人魚のやうなのが上半身を
出すと、またすぽつと潜つて了つた。

「行けつ、スピード。」

私は、さうだ、全く胸ふるひを禁じ得なかつたのだ。

海豹島、幾萬の臘肭獸と、海豹と海驢。

想像だも及ばぬ未知の世男がもうすぐに私たちの眼前に展開されるのだ。

と、横合から、なだれが、波飛沫が瀧のやうに落ちかかつて來た。私たちは外套をひつかぶつた。

それからどうにか傳馬をつけると、ひらひらと板子の上を駆けて渡つた。それからのことである。

前に言つた赤い木造の監守小舎の横から、島の上へとつけた道がある。登りかけたところで、

ぎやを、わを、がを、うわあああ、わを、

ぎやをを、うわうう、ぎやを、わを、わを。

囂々として、騒々として、漠々として、暝々として、恢々として、何ともつかぬ無数の肉音聲が、

蒼い蒼い向うの麗光の空から吼えとどろいて來た。いや、東の空いつばいに響き返して、まだ見えぬ
岩壁の下から下から湧きあがつて來た。耳も聾するばかりのその怒號、吼哮。

愕然として佇ち留つたは私ばかりではなかつた。

と、蒼蠅だ、緑金の點々が眞向から眼を撲ち、頬を撲ち、鼻を撲ち、口を撲ち、たちどころにまた

紫の螺旋の柱となつて襲ひかかつた。

私たちは夢中に駆け上つた。有頂天で。

岩角へのしかけて、三方に板を圍つた見張り櫓、二人ぐらゐしか並べない樋のやうな監視所、その

板圍ひの隙間から、直下の砂濱を差し覗いた——この驚駭、この動顛、この大畏怖、この寂光。

何とこの無人の、原始の、海獸の渾沌世界の、狂歡の、争鬭の、蕃殖の、赤裸々の、瞬間の、また

永遠の眞實相であらう。

無慮三萬の臘肭獸、

と聞いた。

「あつ被服廠だ。」

肉眼で觀た、全く。

累々とした被服廠の死屍、まるであの慘憺たる寫眞のとほりだが、これはまさしく現實に活動し、
匍匐し、生殖し、吼哮する海獸の、修羅場の、歡樂境の、本能次第の、無智の、また自然法爾の大群

集である。

ぎやを、わを、がを、うわあああ、わを、を、を、
ぎやを、うわうう、ぎやを、わを、わを、をう。

この不可思議な、この世のものとも思はれぬ光景は、このグロテスクな黒褐色の群棲の集團は、言語にも想像にも絶したこの北海の膾炙の生活は。

私は觀た、右を、左を、前方を、下を。

左の岩壁には、頂上には、密集した黒と白とのロッペン鳥が幾層積を成して、規律正しき燕尾服の紳士行列を作つてゐる。また進行しつつある。

岩菊、濱菜、もろちの花叢、藜あむぎに茅萱ちがや、

黄だ、黄だ、黄だ、緑だ、金だ。

その下の砂濱一帯の海獣の裸臥像である。

また遠淺の游泳群の擾亂である。飛沫である。

頭、

頭、

頭、

頭、

頭、頭、

頭、

である。

何とまた空は蒼く、海は無際限に黒く、日は燦爛と明るいことだ。

見ろ、この膾炙の集團を。

びたびたと潮に濡れた膾炙は頭が圓く、毛がなめらかに、いかにもその後ろ姿までがしなやかに見える。黒い魚のやうな皮膚の光澤をしてゐる。

だが、陸に上つて既に日に乾いたものは熊のやうに黄褐の毛が逆立ち、頬の鬚が強く張つて、いかにも犖猛な巨獸の相を現はす。

牛のごとく吼ゆるもの、

圖體の憎々しく大きく、群獸をぬいて高く怒號するもの、

うそぶき、笑ひ、濶歩するもの、

孱弱く疲れてゐざり寄るもの、

ごろりと仰向きに臥てゐる牡、右の前鰭で、はたりはたりと煽いでゐるもの、

(暑いんだな、あいつ。鰭を團扇にしてゐるんだ。)

へとへとに熟睡してゐるもの、

のしかかつて噛み合ひ、吼え合ひ、

血を流し、また荒れ狂ふもの、

逃げるもの、追ひかけるもの、

悠々と獨歩し、離れてまた幽かに遊んでゐるもの、

爛々と睨み、

驚いて救ひを求め、

阿諛し、哀願し、心身を他の蹂躪に委しつつ、反抗の氣力も失せはて、氣息また奄々たるもの、重なり重なり乗り越え、飛び越ゆるもの、

乳兒を抱き、哺乳するもの、

匍ひ寄り啼き寄る幼獸、

また、強者に虐殺された死屍、腐れて啄まれる胴體、

砂をかけ合ふ無邪、

旺盛な精力、實にすばらしい生殖慾、

母愛の權化、

煩惱、嫉妬、反噬、

頭と頸とを重ね、

口を寄せ、

また無關心に蹲り、眼を瞑り、

急に驚いて鰭を振るもの、

海に飛び入り、

連れて飛び入り、

跳躍し、潛水し、駛走するもの、

泳ぎ歸るもの、

子を泳がせ、また突き落とし、

魚群をしきりに追ひつめるもの、

鳥の毛の飛ぶふはふはを捉へむとしては身をすくめるもの。

鳥の毛といへば、かうした眞夏の岩壁寄りを幽かに風に吹かれて飛ぶものもある。

白いのは千鳥、

群獸の中にあるのは雪のやうだ。

華魁鴨は嘴が黄色く、頬が白く、羽は褐色である。その鴨もある。

吼える。

ぎやを、わを、がを、うわあああ、わああ、をををを。
逞しい牡牛のやうな巨獣の王が、また、
首を高くもたげて仰いだ。

太陽は空にあるのだ。

海鳴もゐる。

黒い鵜の鳥も岩の角には巢喰つてゐる。

ロッペン鳥も下りてゐる。鷗はまた臙肭獣の棄てた胎盤をもらふのだ。

そして、また、

飛ぶ、

飛ぶ、

飛ぶ。

飛ぶ。

ぎやを、わを、がを、うわあああ、わを、をを、
ぎやを、うわうう、ぎやを、わを、わを、をう。

吼える、

吼える、

吼える、

吼える、

海豹島 その二

讀者諸君。

私は監守の小舎を訪ねた。

先客にはすでに白髪白髯の和製のタゴール老人がゐた。監守は相當の年輩に見えた。黒の制服をつけ、謹直な、素朴な態度で彼に應對してゐた。

粗末なガランとした室内、大きなテーブル、椅子四五脚、多少の器具、雜書、壁に引つかけた帽子、外套、極めて簡素で單純な色彩であつた。

私は一揖して、タゴール老人の傍に坐つた。話題は無論この島に於ける臘肭獸の生活以外のものがある筈はなかつた。

私が今、現像しようとしてゐる幾多の映畫は眼前囑目の大驚異に、加ふるに監守の某氏の談話と樺太廳内務部の發行にかかる印刷物「海豹島と臘肭獸」とより得たる知識に基づいたものであることを言つて置く。

そこで映畫「ハーレムの王」となる。

ハーレムの王

序 畫

うわおう。

天を仰いで咆哮する巨大な海獣一頭。

鬚荒く、牙鋭く、頭毛逆立ち、眼光爛々として、高く上半身を起した。

臙膈獸の成牡(ブル)、年齢八九歳、體重八十貫、牡牛のごとき黒褐色の巨軀。

ハーレムの王である。

うわおう。

再び彼は咆哮した。

堂々たるその勇姿、絶倫の性慾、全身の膨脹、悪戦苦闘の恐るべき忿怒相と殘虐性興奮とは今や去つて、傲然たる王者の勝利感と大威力とに哄笑し快笑し、三度また頭を高く、激しくうち振つた。開いた前肢、嘲り嘲り、巨軀を掻き、また搏きうつ後肢の鰭。砂上だ。

背景は燦々たる白光、

飛沫黒き波濤の連続、オホーツク海の水平線。

うわおう。

ぎやを、わを、がを、うわあああ、わああ、

ををををを。

—

來る。

來る。

來る。

來る。

來る。

來る。

來る。

來る。

來る。

來る。

来る。
来る。
来る。
来る。
来る。

點々と、

團々と、

騒々と、

簇々と、

先驅し、雁行し、競走し、

密集し、亂擾し、軋轢し、潛航し、

跳躍し、

跳躍し、

跳躍し、跳躍し、跳躍し、

ああ、燦爛、冥々、燦爛、陰々たるオホーツク海一面の反射と、影、影、影。

飛沫、

飛沫をあげ、

飛沫をあげ、

飛沫をあげあげ、

すばらしい海獣の群、膾炙獣の群、ブルの水雷、黒褐の無数の肉弾。

千頭、二千頭、三千頭、五千頭、

と、

飛んだ、

宙に大きく近く。

ロッペン鳥だ。

耿として白く、また黒く、燕尾服の、

兩翼を張つて、ひらりと、

畫面を横断して、

消える。

と、

飛ぶ、飛ぶ、

飛ぶ、飛ぶ、飛ぶ、

飛ぶ、飛ぶ、

飛ぶ、飛ぶ、飛ぶ、飛ぶ、

飛ぶ、

飛ぶ。

「キイ、キイく、待つてた。」

「キイ、キイく、来た来た。」

「キイ、キイく、萬歳。」

「キイ、キイく、萬歳。」

「キイ、キイく、ハーレムの諸王萬歳。」

時は五月の中旬、珍らしい晴天、

ロッペン島渡来後一ヶ月、

樺太は東海岸、北知床岬の南方十海裡、岩島は海豹島の前面、東方。

「ロッペン島萬歳。」

「萬歳。」

「異變無いか。」

「無し。」

よしと、先驅の海獣、

挺身した、高く高く。

一飛躍。

二

岸壁の斷層——數萬羽のロッペン鳥、

畫面を斜めに仕切つた砂濱、

波打ち際の

噴水のごとき飛沫、飛沫、飛沫。

来た、来た。

黒褐の肉體の波、波、波。重く、濃く、滑らかに、張り満ち膨れて、弾力性の、眼の光る、鬚の立つた、重なり重なり、打ち寄せ押し寄せ、後から後からと、部厚に部厚にうねりうねり、盛りあがり躍り立つ、——膾蓘獸の波、咆哮、奔騰。

がばと上陸……。

一頭、

二頭、三頭、四頭、數十頭、
我勝ちにと、つぶ濡れの頭をうち振ると、早くも背後をふり向き、牙を鳴らし、前脚をはたいた。
だが、

来る、来る、来る。

後から後からと續いて来る。

飛ぶ、飛ぶ、ロッペン鳥が翻る。

「ハーレムを、ハーレムを。」

彼等成牡（ブル）の大群集はかくして海豹島の東面の砂濱に上陸する。自己のハーレムを形成すべく第一に地位の先取權獲得、次では生存の上の決定的優勝が各自に期せられてあらねばならぬ。生か死かである。

排他、脅迫、防禦、突進、亂闘、流血。

ぎやを、わを、がを、うわあああ、わを、を、を。

ハーレムとは一の成牡（ブル）を中心として成る成牝（カウ）の多くは百頭三百頭の集團である。

見よ、見よ、如何なるブルが最勝の最大のハーレムの王たり得るかを。

英雄兒よ、來れ、

肉弾中の肉弾。

飛ぶ、

飛ぶ、

ロッペン鳥は飛ぶ。

三

濃霧だ、

月光だ、

陰惨たる岩島、

晝面を黒く、眞つ直ぐに截斷した岩壁の一角、

鳥。

冥々、闇々、

咆哮、

悲鳴、——血、血、血。

あ、蒼白い月光、たちまち、
薄らぐ霧。

海獣、海獣、海獣、

肉迫、亂闘、亂噬。

ぐわう、ぐわう、がをかを、
わわわわ、わをわをわを。

濃霧だ、また、

岩壁の一角、
鳥。

四

曇天、

渺々たる黒い水平線、
時として閃々たる白光。

進む、進む、
畫面は左へ左へ。

點。

點。

點。

海獣の頭だ。

あ、^も潜つた。

ゐる、ゐる、ゐる。

無数の廢殘者、

海中の遁走者、臙肭獸、

弱者、負傷者、

老大獸、

力盡き溺るるもの、波とともに盛りあがる、死屍、腐爛した頭。

再び跳躍し、潛行し、

飛沫をあげ、

飛沫をあげ、

海濱ちかく泳ぎよるもの、

新に突き落され、噛み落され、抵抗し、諦めず、血みどろに狂ひ、のたうち、もがき、必死に狙ひ

窺ひ、匍ひあがり、

また噛み合ひ、飛び越え、

動揺し、

仰臥し、

のしかかり、

と、

殺つた。

あ、ブラボウ、

巨大な、若い英雄、ブル。

くわつとあけた口、

上顎、舌、

兩頬の鬚、

眼光。

五

砂上、黒雲の影、いよいよ盛んなる亂闘、

幾千の成牝（ブル）入り亂れてまさに修羅場の壯觀となる。

黒褐、黒褐、黒褐、黒褐、黒褐である。

占領、奪掠、突撃、死守、

悶絶、再襲。

ああ、しかもまだ彼等が争闘の主因たる成牝（カウ）たちは遙かな遙かな水平線の向うにあるのだ。

ブル即情慾である。彼等は本能そのものなのだ。衝動は自然だ。

全身をあげて彼等は搏つ、生きるが爲には、

惨害——自己と地位の確守だ。

勝て。

弱者は畢竟するに弱者に過ぎないのだ。

勝て。

その外は死だ。

眼、

眼、

おそろしく瘳猛な二頭が向き合つた。

六

岩壁の一角、
鳥。

成牝が来た。

キイ、キイ、キイ。

無数の

飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ、ロップペン鳥。

晴天、

六月の下旬、成牝の来島に遅ること、二三週後、

ああ、たうとう成牝の大群が来た。

聴け、海豹島の地響を、動悸を。

九千九百の、

いや、一萬、二萬の若妻が来たのだ。

七

新らしき曙の波濤に乗り、オホーツクの海阪を越え、渾沌として黒く漂ふ浮脂の大いなるうねりに、
幾萬となく群集して膾炙獣の若妻成牝らは来る。

しかもまた、雲霞のごとく後から後から押し寄せるのだ。
北海の黎明である。

雲は微茫の中にあつて暗く、霧は涯しなく吹き満ち、水平線のかなた遙かに澄みとほる紫の空が透
く。

その遙かな、太陽の生るるところより、生まむがために成牝らは来る。
彼女らは總てが懐胎してゐるのだ。

身は重く、しかも心は強く、世界の母性として、彼女らは萬里の波濤を越え、風雨に堪へ、陣痛の苦と新生の輝かしい希望とを懷いて、永く忍び、永く忍びつつ、しかも衝き進むべくして衝き進みつつ、ああ、彼女ら成牝の大群が来る。

渺たる岩島海豹島こそは彼女らの光榮ある産褥であり、新らしき、また盛んなる蕃殖場である。

飛沫だ。

飛沫だ。

飛沫だ。

おお見よ、また、

朝暾すでに朱なりだ。

八

黒く、青く、ささ縁のみ光つた、全面の光らぬ波濤、

しかも重厚なりねりの盛りあがり、また雪崩れて、見るまに丘となり谿となる。

北海の荒海である。その海豹島の波うちぎは。

「若妻が来た。」

一齊の咆哮、驚天動地の大喜、世界的情慾。

それと見た幾千の膾炙の成牝はその波うちぎはに殺到する。鈍重な巨軀の逸りに逸つた匍匐の醜態が今、一時にまた光り輝くばかりの黒褐の毛のなだれとなり、地響となり、奮ひたつ香炎の放電體となる。

氣早なのは海中に飛び入り、飛び入る。

驚くべき俊敏。すばらしい身軽さ。

飛沫が立つ。立つ。立つ。

砂上の亂闘。咆哮、咆哮、咆哮。

ぎやを、わを、がを、うわあああ、わを、ををを。

既に見よ、海濱に近づいて却つて怯々として悲しく泳ぎ、恐れて潜り、驚いて退きつつ、ひたすらに上陸する隙を窺うて容易に果せぬ成牝、

何と、あの顔のさびしさ、素直さ、

あつ、また波から

出した、出した、

あの眼、あの眼、
人間の母性に見る最も貴い、崇高なあの眼、あの眼。

やつ、飛びつく、飛びつく。

血みどろな、敗れてもなほ弾き立つ情念、老いてもまだ衰へぬ生存慾、力盡きて海中に噬み落され
た弱者、老大獣の必死の争奪戦。

あつ、四方から挑みかかる、躍りかかる。

無慙——女獣は引つ裂かれたのだ。

一頭。また一頭。

英雄よ救へ、ハーレムの最大の王なるべきブル。

ぎやを、わを、がを、うわあああ、わを、をを、

飛び入る、飛び入る、飛び入る。

しかもその時、牡牛のごとく狸々熊のごとき巨大なブル、

たちまちにして天を仰いで咆哮すると見るや、ざんぷ洶然とばかり飛び入つた、たたた。

萬歳。

だが、だが、前から前から襲來する。後から後からと挾撃する。

容易に上陸できさうにないのだ。

飛沫。飛沫。

なんと悲しい女性。

だが、だが、激しい陣痛の兆候は來る。生れむとする者は胎内に張りつめる。何としても、死んでも生まなければならないのだ。

必死の成牝カウの上陸となる。

たちまちまた、波うち際の、前にも増した肉弾戦、咆哮、亂噬。

寧ろ凄惨な男性の性慾、暴力、所有慾。茲にしてまた引つ裂かれる女性の犠牲死體が、ぢりぢりと日光と砂熱とに焼け爛れるのだ。

飛ぶ、飛ぶ、

飛ぶ、

ロップペン鳥。

や、や、處女獸の大群が来た。あの中にこそ未だ汚されぬ、しかも愈々花のごとく成熟した女性が、眞の花嫁がある。

九

同じく砂濱、

岩角、監視所の下。

ハーレムの諸王萬歳。

ハーレムの小なるも大なるも、既にその位置に據つて形勢された。

小なるは二三頭の成牝を、大なるは幾十の成牝を、更に最も大なるは、百頭の成牝を、それぞれに收容し、また神聖なる處女獸の幾頭をその保護の下に置いたハトレムの諸王たち萬歳。

大洋は渺々たり、日光は燦爛たりである。

咆哮せよ。

汝らは勝つたのだ。

警戒せよ、

弱きはまた、追はれ、殺され、盗まれるのだ。

不眠不休だ、ああ、これから愈々。

岩角、監視所、

木の圍ひの上から大きな人間の顔が出る。

十

巨大に引き伸ばされた黄金色の岩菊の花、

その岩壁の下の花叢、

太陽光は輝々としてその花叢にある。

微風が花瓣を動かし、また耀かす。

七月の静謐、

黒と白との寛洪な燕尾服の紳士、ペンギン鳥の従弟、ロップペン鳥が、その上の岩壁の突處に立つてゐる。

横向いて、なんと長閑なそのまるい眼だ。をりをり岩菊の蕊を覗き込む。

蟻の黒い大きな觸角が動く。

と、すばらしく擴大された幼獸のなめらかな黒い頭と兩肢の兩つの鰭とが幕面の右下から匍ひあがつて来る。

なんとその面の、眼の可憐なことだ。
 微風が花瓣を動かし、また躍かす。
 膾炙の兒はすでに生れてゐるのだ。おそらくは生後一ヶ月は経つてゐよう。彼等の母は上陸する
 と間もなく輝かしい産褥に就いた。ハーレムの王たる英雄ブルの絶大の愛と保護とによつて。
 生れたものに幸あれ。
 微風が岩菊の花弁を動かし、また輝かす。
 何か深く聴いてゐる。
 巨大な蟻の觸角である。

十一

ここで、諸君、曾て記した海豹島第三光景となる。この「十一」の映畫は惜しいかな、前に切り取
 つて映したのでここには復寫せぬ。が、兎に角、三萬頭の膾炙獣により成る數千百のハーレムに於け
 る割據、爭奪、保護、飛血、生殖、哺乳の大歡樂境大修羅場を現出する。惡戰苦闘の成牝どもは不眠
 不休、飲まず食はず、而かも絶倫なる精力はその殘虐と肉彈戰の間にも驚くべき生殖力を發揮する。
 殊にハーレムの王中の王、その最勝王ブルは三百頭の成牝と交接し、その懐胎するに到るまで続け
 て抱擁し、その三百頭ごとくを懐胎せしむる。さうして、漸くにしてハーレムを解放するのであ

る。

成牝の體臭。

想像だも及ばぬ生きた「被服廠の死屍」さながらの、累々たる黒褐の、頭の、圖體の、鰭脚の、本
 能次第の、無智の、性慾そのものの、阿修羅の、また自然法爾の大群集、その大群集を見よ。

ぎやを、わを、がを、うわああ、わを、をを、
 ぎやを、うわうう、ぎやを、わを、をう、
 ぎやを、わを、がを、うわああ、わを、をを、
 ぎやを、うわうう、ぎやを、わを、をう、
 ぎやを、わを、がを、うわああ、わを、をを、
 ぎやを、うわうう、ぎやを、わを、をう。

だが、これらの強大なハーレムも遂には分裂する。何れは三四ヶ月の間だ。十月十一月、寒風の吹
 き荒むとともに、懐胎したカウの大群集は成長した幼獣、處女獣と南方に向つて去り、半成牝も去り、
 さうして、かの絶倫なる諸王、ブル中の英雄たちも、不眠と絶食と間斷なき性交とに、疲勞困憊の極
 は、へとへとによるよるになつて、漸く以後から後から蹤いて去るのだ。

ああ、だが、今は今は歡樂の酣である。

十二

同じく海豹島は砂濱の南端、群棲場の光景。

哀れなるかな、激烈なる生存競争に敗れて氣息奄々たる、ただ一頭の成牝若しくは處女獸をさへ收め得ず、小なる小なるハーレム一つ創り得ずに止む永遠の孤獨者、または昨の英雄、曾てのハーレム中の悍猛者、しかもまた老大奮はぬ今日の悶々者、且はまた既に煩惱の兆して、未だ力弱き半成牡。耻さらしの、孤獨地獄の、しかもまた累々たる半死の膾膾の群棲場。

北の、砂濱つづきのすぐ近くには盛んな蕃殖場、咆哮、生殖、大歡樂。

眺めては眺めては、悲しきうな、悔しきうな、諦められぬ、どうにもなれぬ、死ぬにも死なれぬその眼、眼、眼、眼。

彼らをこそまた、監視所の人間どもは撲殺してまはるのだ。曉天に、月夜に。

しかもまた、彼らの群棲場には一羽のロップペン鳥すら、ああ、頬の白く嘴の黄色い華魁鴨の姿すら、小さな海鳴すら、飛んでも來なければ、羽ばたいても遊ばないのだ。

今さら、蕃殖の能力なき彼等、彼等は早晚撲殺されるのだ。撲殺されて毛皮は賣られ、肉は鹽漬にされ、また野師の手に買はれて了ふ。ところで畫面は膾膾賣。

「ええと、皆さん、ここもと御覽に入れまするは、樺太海豹島は膾膾の鹽漬肉でござい。何々ピン以上の滋養強壯劑、陰萎、腎虚の大妙藥、物はためし、效能靈驗、萬病の持藥、このごろ流行の若返り法などとは論外、ええ、膾膾の腎臟——」パツと消えると、

波も嘲る。波も嘲る。

沖には處女獸、

ひらひらとロップペン鳥。

雲は白い白い。

十三

群棲場の前の、波、波、黒い波、

小さな岩、

岩の上には小さな黒い頭の膾膾の幼獸がある。

一頭。

また匍ひあがる一頭。

二三頭。

波が来る。つるりと滑り落ちる幼獸。あつはつはつは、これはおもしろい。

三方四方からまた匍ひあがる。
また波が揺り越す。
また滑り落ちる。

なんと可憐な子供であらう。彼らは嬉々として遊ぶ、遊びを遊ぶ、日光と風と波とに。
何たる無邪、何たる永遠相。

ああまた、飛沫をあげ、飛沫をあげて、潑刺と泳ぎ、潜り、また跳りはぬる三四歳の子供ども。
海は彼らに笑つてゐる、永遠にもの愛^{かな}しく。

説明者、

『童謡「北の海」を御紹介いたします。』

黒くて光らぬ

オホーツク海の波は

ざんざんざぶりこと

岩うつばかり。

岩へとあがるは

おつとせいのこども、

ざんざんざぶりこと

波が来ておとす。

またまた、顔出す

おつとせいのこども、

ざんざんざぶりこと

波が来ておとす。

いつまで遊ぶぞ、

おつとせいよ、波よ、

ざんざんざぶりこと

お月さまあがつた。

幕面の光景、次第に月明になる。

蒼茫とした岩のうへの幼獣の群、
霧が幽かに飛ぶ。

十四

第「一」の一頭の巨大獣再寫。

大いにうそぶけ、

ハーレムの王中の王、その最勝最大の王たる英雄第一のブル。

十五

波濤、波濤、波濤、

渺たる海豹島の遠景、

曉天、

たちまち、

幕面を斜めに切つて映つたロップ、

大汽船の鐵欄、

半側だけ見える巨大な通風筒。

と、ゆらりと、葉巻を銜へて出て來た支那服の北原白秋、

その顔が大きく微笑すると、微笑しつつ、いよいよ大きく、更にいよいよ大きく幕面いつぱいになる。

「ハーレムの王」 畢。

卷末に

大正十四年八月、私は鐵道省の主催に成る樺太觀光團に加はつて、二週間に亘る汽船高麗丸の航海を楽しんだ。横濱から小樽、國境安別、眞岡、本斗、豊原、敷香と巡遊して、最後にその旅行の主要目的地であつた海豹島の壯觀に驚き、大泊より更にオホーツク海を南下して北海道の稚内ワッカナイで一同と別れた。さうしてまた旭川でアイヌの熊祭を觀、札幌に淹留し、函館より海を越えて當別のトラピスト修道院を訪ねた。ただこのフレップ・トリップは主として樺太に於ける收穫である。觀光團解散後の北海所見はいづれ機を得て稿を改めるつもりである。この行は初めより歌友吉植庄亮君と伴であつた。フレップ・トリップ。樺太葡萄の紅い實と黒い實。

八月の日光、南風、波濤、

丈餘の路と虎杖、

パルプと斷截機、

燦爛たる楡の微笑、火焰菜と燕麥、緬羊と白樺、驟雨、驟雨、驟雨、

黒とどの原生林、

露人の家々、

ツンドラ地帯の極樂園。

ああ、海豹島、三萬の膾炙獸と三十萬のロップペン鳥。

今思うても實に愉快な旅行であつた。

若かれと私は叫ぶ。

若かれ、若かれ、若かれと。

北原白秋著作 (新潮文庫版)

白秋詩歌選 價 三〇

雀の生活 價 三五

北原白秋詩集 價 二五

昭和十五年五月四日印刷
昭和十五年五月七日發行



プツリト・プツレフ

(錢十六價定)

著者 北原白秋

發行所 新潮文庫刊行會
東京市神田區小川町三丁目六

右代表者 佐藤義亮

東京市牛込區矢來町七十一番地

新潮社

電話牛込 八八〇五番
八〇〇七番
八〇〇九番

振替東京 八〇八番

刷印社會式株刷印士富

(刷島初)

新潮文庫既刊總目錄

宮内省藏版 明治天皇御集

小説・戯曲 (黄色帯)

森鷗外 阿部一族	泉鏡花 婦系圖	小栗風葉 終編金色夜叉	小栗風葉 戀さめ・戀慕ながし	尾崎紅葉 夜色又	二葉亭四迷 平	二葉亭四迷 其面影	樋口一葉 樋口一葉傑作抄	夏目漱石 草枕	夏目漱石 彼岸過迄	夏目漱石 硝子戸の中
廣津柳浪 今戸心中 <small>變目傳 河内屋</small>	小杉天外 魔風戀風	小栗風葉 終編金色夜叉	小栗風葉 戀さめ・戀慕ながし	鳥崎藤村 家	鳥崎藤村 春	鳥崎藤村 ある女の生涯	鳥崎藤村 嵐	田山花袋 妻	田山花袋 縁	德田秋聲 徽
徳田秋聲 足	岩野泡鳴 耽	谷崎潤一郎 蓼喰ふ	谷崎潤一郎 盲目物	岡本綺堂 修禪寺物語	岡本綺堂 半七捕物帳	近松秋江 別れ <small>1 2 3</small>	高濱虚子 俳諧	志賀直哉 夜の光	武者小路實篤 愛	武者小路實篤 生きんとする者
徳田秋聲 足	岩野泡鳴 耽	谷崎潤一郎 蓼喰ふ	谷崎潤一郎 盲目物	岡本綺堂 修禪寺物語	岡本綺堂 半七捕物帳	近松秋江 別れ <small>1 2 3</small>	高濱虚子 俳諧	志賀直哉 夜の光	武者小路實篤 愛	武者小路實篤 生きんとする者

菊池寛 勝	菊池寛 青春圖會	菊池寛 忠直卿行狀記	菊池寛 藤十郎の戀	菊池寛 受難華	菊池寛 結婚二重奏	菊池寛 有憂華	菊池寛 第二の接吻	菊池寛 恩讐の彼方に	菊池寛 眞珠夫人	菊池寛 慈悲心鳥	久米正雄 美しき鷹	久米正雄 學生時代	山本有三 破船	山本有三 唐吉人	山本有三 同志の人々
佐藤春夫 田園の憂鬱	佐藤春夫 都會の憂鬱	久保田万太郎 末枯・大寺學校	宇野浩二 戀愛合戦	長田幹彦 祇園夜話	長田幹彦 旅役者	藤森成吉 若き日の悩み	吉田絃二郎 無限	吉田絃二郎 人間	吉田絃二郎 靜夜曲	吉田絃二郎 高原の日記	吉田絃二郎 島の秋	室生犀星 あにいもうと	室生犀星 性に眼覚める頃	島田清次郎 地上 <small>(地に潜むもの)</small>	島田清次郎 地上 <small>(地に叛くもの)</small>
江馬修 受難者	江馬修 地上の星座	牧逸馬 この太陽	牧逸馬 海のなない港	牧逸馬 七つの海	牧逸馬 相思樹	中村武羅夫 蒼白き薔薇	加藤武雄 久遠の像	吉屋信子 海の極みまで	吉屋信子 空の彼方へ	吉屋信子 暴風雨の薔薇	吉屋信子 双鏡	吉屋信子 理想の良人	直木三十五 仇討淨瑠璃坂	吉川英治 雲霧閣魔帳	吉川英治 貝鼓
長谷川伸 直八こども旅	長谷川伸 直八こども旅	長谷川伸 直八こども旅	長谷川伸 直八こども旅	長谷川伸 直八こども旅	長谷川伸 直八こども旅	長谷川伸 直八こども旅	長谷川伸 直八こども旅	長谷川伸 直八こども旅	長谷川伸 直八こども旅	長谷川伸 直八こども旅	長谷川伸 直八こども旅	長谷川伸 直八こども旅	長谷川伸 直八こども旅	長谷川伸 直八こども旅	長谷川伸 直八こども旅

海外小説・戯曲(赤色帯)

布施延雄	武林無想庵	ドオデエ	1 2 3 4 5 6	山内・大宅	内藤 濯	高橋邦太郎	平野威馬雄	前田 晁	廣津和郎	廣津和郎	堀口 大	水野 亮	バルザック	生田大杉	宇高 伸	中村 星湖	フロオベール
カ	サ	ル	フ	モンテ・クリスト伯	モリエール傑作集	椿 姫	モオパッサン選集	春の戯れ	脂肪の塊	女の一生	シャベエル大佐	従妹ベック	懺悔録	ナ	ボヴリイ夫人	ナ	ボヴリイ夫人
マアテリシク	カ	東郷 青児	新庄 根津	三好 達治	堀口 大	石川 淳	堀口 大	堀口 大	堀口 大	堀口 大	堀口 大	堀口 大	堀口 大	堀口 大	堀口 大	堀口 大	堀口 大
マレエヌ	追ひつめられて	怖るべき子供たち	一粒の麥	アンドレ・ワルテル	背徳者	夜ひらく	四つの戀物語	小さな町	根こぎにされた人々	プチ・ピエール物語	女優タイス	海の嘆き	コロシバ	コロンバ	コロンバ	コロンバ	コロンバ
原ゴ	阿部 次郎	昇 夢	中村 白葉	江 修	昇 夢	生 夢	米川 正夫	米川 正夫	米川 正夫	米川 正夫	米川 正夫	米川 正夫	米川 正夫	米川 正夫	米川 正夫	米川 正夫	米川 正夫
ど	人は何て生きるか	閣の力	幼・少年	復 活	初	ル	その前	父と子	永 遠	白	虐げられし人々	検 察	隊長ブーリバ	隊長ブーリバ	隊長ブーリバ	隊長ブーリバ	隊長ブーリバ

徳永 直	小林多喜二	石坂洋次郎	下村千秋	尾崎士郎	川端康成	横光利一	片岡鐵兵	片岡鐵兵	小島政二郎	小島政二郎	細田民樹	林 不忘	林 不忘	長谷川 伸	長谷川 伸	長谷川 伸	長谷川 伸
太陽のない街	蟹工船・不在地主	私の短篇集	天國の記録	悪の序章	浅草日記	月夜	と 緑	花嫁學校	心の青空	花咲く樹	真理の春	魔像	大岡政談	一本刀士俵入	母	母	母
甲賀三郎	甲賀三郎	江戸川亂歩	江戸川亂歩	江戸川亂歩	江戸川亂歩	江戸川亂歩	江戸川亂歩	江戸川亂歩	田中貢太郎	谷 譲次	谷 譲次	谷 譲次	三宅やす子	岡本かの子	川口松太郎	川口松太郎	川口松太郎
幽 靈 犯 人	犯罪發明者	孤 島 鬼	蠶 手 鬼	黒 蜥 蜴	吸 血 鬼	黄 金 假 面	パノラマ島奇談	探偵小説	剪 燈 新 話	踊る地平線	浴槽の花嫁	テキサス無宿	偽れる未亡人	雛	鶴八鶴次郎	鶴八鶴次郎	鶴八鶴次郎
第十卷	第九卷	第八卷	第七卷	第六卷	第五卷	第四卷	第三卷	第二卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷	第一卷
獨歩病牀録	詩及小品集	敗れし青年時代の日記	獨歩書簡	獨歩集	獨歩集	獨歩集	獨歩集	獨歩集	獨歩集	獨歩集	獨歩集	獨歩集	獨歩集	獨歩集	獨歩集	獨歩集	獨歩集

生田春月	澄める青空・自然の恵み	現詩人全集	千家元磨集	窪田空穂	新選窪田空穂集
生田春月	夢心地・春の序曲	生田春月	ゲエテ詩集	新選窪田空穂集	窪田空穂
室生犀星	室生犀星詩選集	生田春月	ハイネ詩集	新選窪田空穂集	窪田空穂
現詩人全集	初期詩人集	新城和一	ユウゴオ詩集	新選窪田空穂集	窪田空穂
同詩人全集	島崎藤村集	幡谷正雄	ワアヅワス詩集	新選窪田空穂集	窪田空穂
同詩人全集	土井晩翠集	幡谷正雄	バイロン詩集	新選窪田空穂集	窪田空穂
同詩人全集	薄田泣菫集	日夏耿之介	ワイルド詩集	新選窪田空穂集	窪田空穂
同詩人全集	蒲原有明集	白鳥省吾	ホイットマン詩集	新選窪田空穂集	窪田空穂
同詩人全集	岩野泡鳴集	山内義雄	佛蘭西詩選	新選窪田空穂集	窪田空穂
同詩人全集	野口米次郎集	生田長江	神曲	新選窪田空穂集	窪田空穂
同詩人全集	横瀬夜雨集	繁野天來	失樂園	新選窪田空穂集	窪田空穂
同詩人全集	北原白秋集	繁野天來	海賊	新選窪田空穂集	窪田空穂
同詩人全集	三木露風集	田部重治	イノック・アーデン	新選窪田空穂集	窪田空穂
同詩人全集	川路柳虹集	生田春月	散文詩	新選窪田空穂集	窪田空穂
同詩人全集	生田春月集	生田春月	イヴンヂェリン	新選窪田空穂集	窪田空穂
同詩人全集	堀口大學集	金子薫園	新選金子薫園集	新選窪田空穂集	窪田空穂
同詩人全集	萩原朔太郎集	若山牧水	新選若山牧水集	新選窪田空穂集	窪田空穂

研究・評論
日本古典文學・宗教
 傳記・戰記・その他
 (白色帶)

木村毅	小説研究十二講	阿部次郎	種々の起原	山川智應	和譯法華經
楠山正雄	近代劇十二講	大杉 榮	理想國論	久保正夫	聖フランシスの小花
昇 曙夢	トルストイ十二講	津久井龍雄	富國論	三好十郎	バイロン傳
土岐善麿	明治大正藝術史	神永文三	人生論	マビヨオ	ユゴオ傳
次田 祐吉	古事記・日本書紀研究	トルストイ	性慾論	ビエル・ガン	アンドレ・ジイド
折口信夫・澤瀨久孝・土岐善麿	萬葉集研究	相馬 御風	我が懺悔論	櫻井忠温	肉弾
島津 久基	源氏物語研究	相馬 御風	貧者の寶	櫻井忠温	銃
山岸 徳平	山家集・金鶴集研究	相馬 御風	愛讀者の讀本	櫻井忠温	戦はこれからだ
藤(茂) 風卷	近松 研究	相馬 御風	スターリン	櫻井忠温	新編將軍乃木
加藤順三・黒木勲・藤村 作	西鶴 研究	相馬 御風	これが映畫だ	櫻井忠温	此 一 戦
片岡 良一	芭蕉・蕪村研究	相馬 御風	現代譯源氏物語	櫻井忠温	乃木將軍詩歌物語
山岡 良一	一茶 研究	相馬 御風	八犬傳物語	櫻井忠温	漫畫人の一生
太田 水穂	短歌に入る道	相馬 御風	近松 物語	櫻井忠温	漫畫坊つちやん
河東 碧梧桐	俳句に入る道	相馬 御風	西鶴物語	櫻井忠温	漫畫吾輩は猫である
萩原井泉水	俳句は斯く解し 斯く味ふ	相馬 御風	好色一代男	櫻井忠温	漫畫テクノクラシイ
窪田空穂	魂 禮 讚	相馬 御風	好色二代女	櫻井忠温	
萩原井泉水		相馬 御風		櫻井忠温	
高濱 虚子		相馬 御風		櫻井忠温	
生田春月		相馬 御風		櫻井忠温	
生田春月		相馬 御風		櫻井忠温	

送料二十錢以下三錢 三十五錢以下六錢 四十五錢以下九錢 五十五錢以上十二錢

797
179

新潮社最新刊書類

- 白蘭の歌 久米正雄 送料一〇〇
- 簪 武田麟太郎 送料一八〇
- 北の地平線 和田 傳 送料一六〇
- 太宗寺附近 丹羽文雄 送料一四〇
- 素足の娘 窪川稻子 送料一八〇
- 如何なる星の下に 高見 順 送料一八〇
- 蕃界の女 中村地平 送料一四〇
- ジイドの日記 新庄嘉章 送料一八〇
(一九三三—一九三九)
- 母は叫び泣く ヘレン・カーライル 送料一四〇
- ガザに盲ひて ハクスレイ 送料一五〇
- 西村孝次 譯 送料一四〇
- 明るい生活 佐藤義亮 送料一五〇

昭和名作選集

全二十冊の
中より選ぶ

價各壹圓
送料十錢

- 寢園・機械……………横光利一
- 花のワルツ(他四篇)……………川端康成
- 濁流(他八篇)……………葉山嘉樹
- 清貧の書(他六篇)……………林 芙美子
- 丹下氏邸(他三篇)……………井伏鱒二
- 聖家 族(他三篇)……………堀 辰雄
- 鶴は病みき(他四篇)……………岡本かの子
- 北 京(他二篇)……………阿部知二
- 贗修道院(他三篇)……………深田久彌
- 第一義の道(他六篇)……………島木健作
- 蒼氓(三部作)……………石川達三

